

578

290



\* 0054757000 \*

1

0054757-000

578-290

山の伝説

青木純二・著

丁未出版社

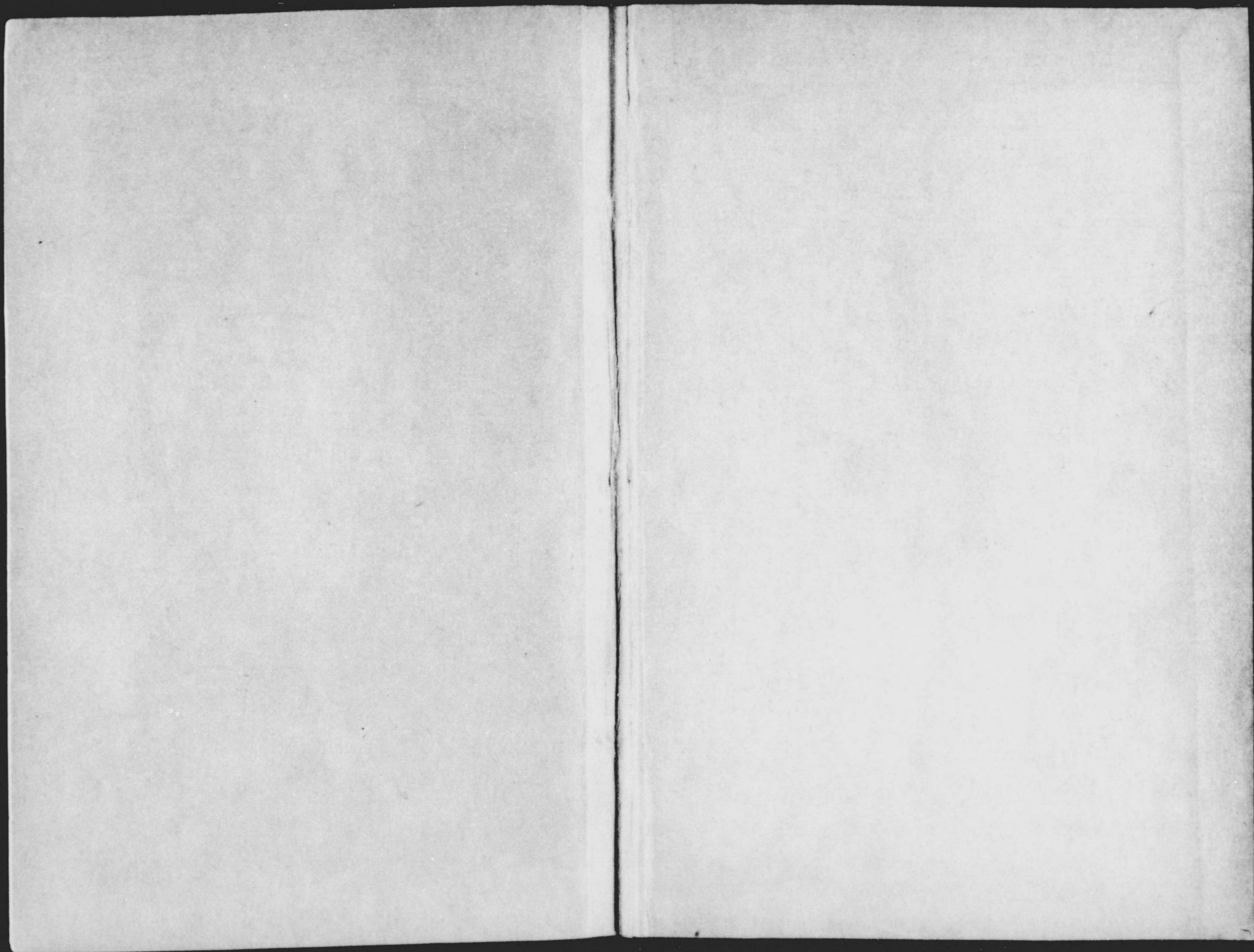
日本アルプス篇

昭和5

AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年3月2日  
けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです







山 傳 の 説

日本アブルス篇

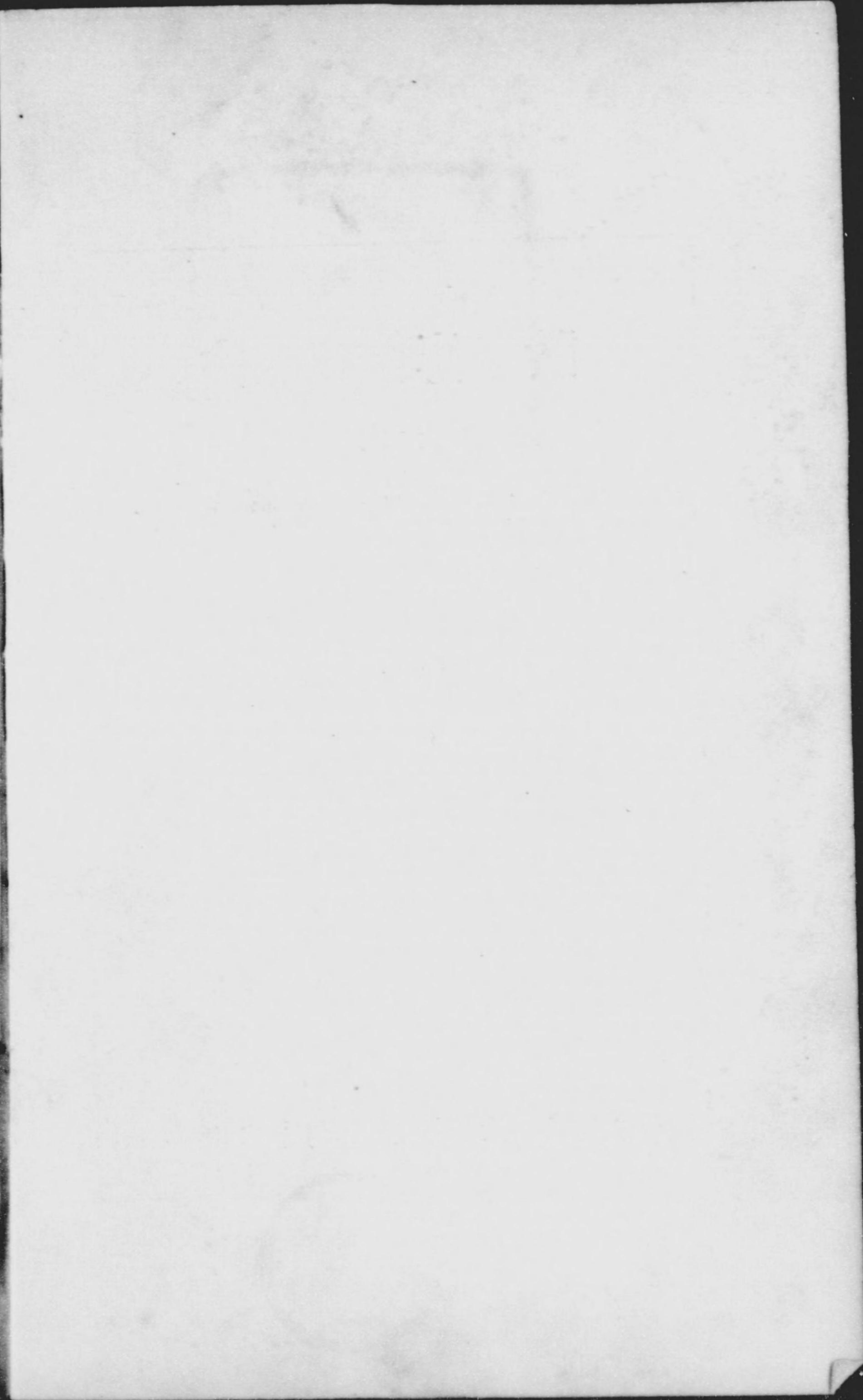
青木純三 著

東京 丁未 出版 社 發行





望 眺 の 舟 ケ 焼

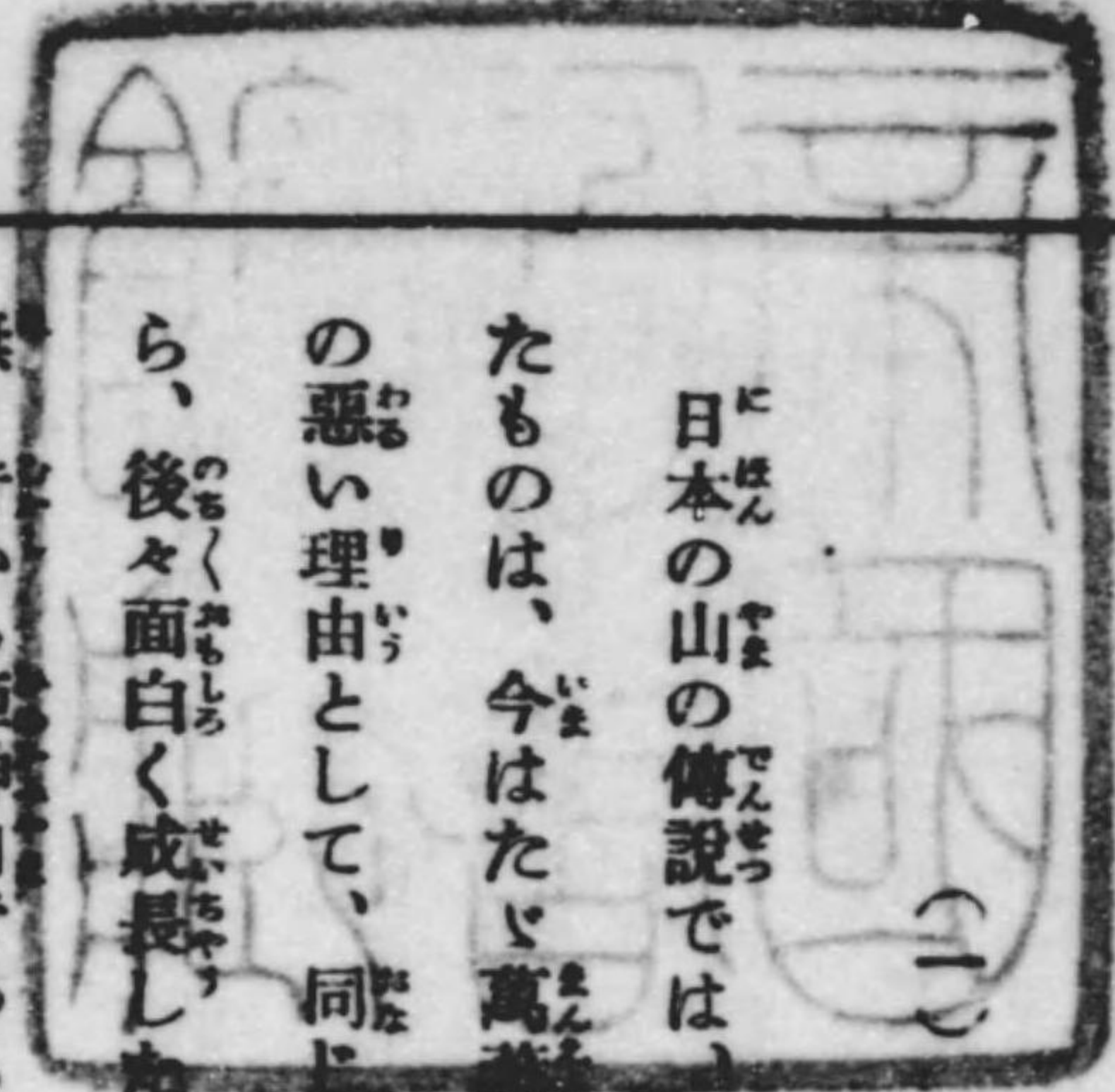




578-290

# 山と傳説

柳田國男



日本の山の傳説では、三山の争ひといふのが古くから知られて居る。曾て大和國で有名であつたものは、今はたゞ萬葉集の歌であるが、奥州では北上川の上流などに、岩手山と早池峯との仲の悪い理由として、同じ語り草がまだ生きて行はれて居る。或は是も單純なる高さくらべの話から、後々面白く成長したのかも知れぬが、それにしても其中に立つ美しい山の名が、誰謂ふとも無く昔から姫神山である。どうして此様な素朴なる物珍らしさが、久しい人間の世代に亘つて、飽きられもせず傳はつて來たものか。それが先づ我々の不思議の一つである。

しかも是よりも今一段と短い話、單に二つの山が喧嘩をしたといふだけの話ならば、殆ど無い



府縣は無いと云ふ程に數多い。さうして今でもまだ成長して行かうとして居るのである。是が若し作者のある文藝であつたら、又かと言はぬ者は無かつたことと思ふが、此方は既に何十世紀の間、引續いていつも同じやうなことを繰返して居たのである。例へば筑波は富士よりも遙かに低い山であるが、天の大神の恩寵を受けたことは、彼に比べて何倍か豊かであつた。といふ由來を詳かに、又人間らしく叙述したものは、是も奈良朝の常陸風土記であつた。近世各地に行はれた同種の傳説は多いけれども、概して是よりも簡單であり且つ更に子供らしく、故人が豫め次の時代の爲に、布疋修飾合理化の勞を、執つてくれたかの觀あるも一奇である、但し私は此點に關して、多分正しからうと思ふ一つの解釋を持つて居る。私の解する所では、傳説には夙くから二通りの鑑賞家があつて、文字無き凡人大衆は一つの群を爲し、所謂詞人墨客は他の一つに屬して居た。記録は素より第二の者の管掌する所であつた故に、何が傳ふるに足るかの判別に關しては彼等の趣味と智識とが獨り働き、一方は單に之を文學として尊敬するばかりで、傳説として受入れぬものが多かつたのである。以前はこの二つの群の間に、可なり著し、

から、或は理解の能力もちがつて居たか知れぬが、主としては信じようとする態度の差、もしくは古い形を愛する心持の有無であつた。耳から承け繼いだもので無ければ、口から傳へようとなかつた凡人の數が多く、それが又文士によつて輕しめられ、齡せられなかつたといふことが、偶然にも記録以前の傳説を、色々と民間に保存して居てくれたのである。青木純二君の新たなる書物が、古い記録の最後のもので無かつたか否かな、言はゞ同君が右二通りの鑑賞家の、どちらの側の人であつたかによつて、決せられるわけである。

(一)

次に此書物を行くうちに、必ず出くはすであらうと思ふ今一つの不思議は、この所謂日本アルプスの山國に、記録最古の「三山の争ひ」のみならず、更に今一段と平凡なる二つの山の高さをくらべ迄が、まだ一向に發達して居らぬことである。著名な一萬尺が嶺を連ね、山といへば誰でも先づ思ふ中部日本の高山幽谷に、是が缺けて居るのは奇怪のやうにも考へられる。しかしこの



點も私には大よそ説明が付くやうな氣がするので、それは一言でいふならば傳説が主として平野の産物であるからであつた。山が自ら語つたもので無いからであつた。我々の信仰が傳説に化して、末には國擧つて之を説き、千年を過ぎて尙當初の若々しさを保存し得たといふのも、要するに之を聽く人があり、且つ多數であつたからである。ところが山國はもと却つて其要件を缺いて居た。だから話頭は常に山を望む人々によつて提起せられたのみならず、恐らくは同時に双方の山を望み得るやうな地點に於て、高さ競べや妻争ひの物語は、夢み始められたと思はれるのである。大和の三山は布留纏向の東の高みから、殊に夕の空が其輪廓を際だせ、又は川霧の上に峯ばかり浮んで見えた時に、最もその傳説の印象が鮮かであつたらう。今日行はれて居る多武峯と高見山の高さ比べなどは、それからすつと南の、紀の川中流の村里まで行かぬと、あゝいふ空想は抱かれさうにも無い故に、後になつて追々と發達したのである。勿論富士と淺間や鳥海山とのやうに、一度に二つの山を見ることの出来ぬ例も多いが、是は所謂遠近人が見て過るやうになつてから、旅の話として次々に承け傳へたものと見られる。山の神祕の久しく閉されて居た土

地に、新たに村を開き小屋を掛け、多くの旅人が來り宿るやうになつてから、始めて發生し進化した傳説が、更に別種の興味ある地方色を呈することは、此書が恐らくは始めて之を證明して居るので、民族の古い傳説を知りたいとならば、寧ろ都府四周の年久しい耕地の間に、之を訪れ求むべきものであつたのである。

だから又記録の古さといふこと、傳説其ものゝ古さとの間には、普通に想像されて居る程の深い關係は無かつたのである。例を山々の争ひに取つて言ふならば、香山耳山の妻争ひが萬葉の歌人に詠せられた頃には、あの傳説は既にあれだけの略筆を許すまでに、當時の人々には知れ渡つて居たのであるが、しかもその原形であり兄であつたかとも思ふ簡單なる口碑は、今でも數限りも無く國々の低地に、歌にもならずにまだ流布して居るのである。さうして傳説の流布と、その發生とは又二つのものであつた。單に記録に保存せられて居るといふことが、少しでもその傳説の先行を證明するもので無いことは、比較によつて段々に之を知ることが出来る。記録はただ自分の時代よりも前に、既にその一つの口碑があつたといふことを語るだけで、少しでも他の



口碑の古さを極める力は持つて居ない。さうして實際に又澤山の古く粗野なる民間傳承が、丸々記録の干渉を受けぬ自由なる生活を、つい近頃まではして居たのである。地方の文學の新たな興隆と、旅を楽しむ人々の親切とが、必ず或一定の條件の下に、歓迎せられねばならぬのは其結果である。若し幸ひにして其條件が充たされてあるならば、「山の傳説」は何よりも大いなる學問への貢獻であり、さうでなかつたならばたゞの讀物の一つの追加に止まる。故に私は先づ其差別を明かにする必要を感じるのである。

(三)

山國が傳説の採集地として、特に大切な理由は三つ以上ある。其一つは山に限り、山中の人の集團で無ければ、發生し得なかつた傳説が必ずあつたこと。是は交通が平野に偏して居た結果、恐らくは今まで比較的省みる者が少なく、従つて高山植物のやうな懐かしさが今もあるので、どれが山地の特産であるかといふことは、固より一通りの平野の智識を持つ人のみが、靜かに觀察

した上で知れることであるから、其楽しみは一段と奥深いものである。それが人間の定住のおくれて始まつたといふことから、假に新しい發生だと推定せられるにしても、寧ろ其種となつた何物かの、久しい發芽力の保存に驚歎すべき場合が多いことと思ふ。第二には雲より下に在る都邑の傳説が、流布して山に入つて如何なる形を取り、この特殊の環境と相觸れて、果して如何様の調節を遂げたかといふことが、山に来て見なければ知る由の無いことである。低地の傳説は緣起により、又は切れくゝの歴史の智識により、更に進んでは各時代の好尚や迷信によつて、屢々原形の尋ね難いまでに、切り繼ぎ捻ぢ曲げ水や砂糖を交へ加へられてある間に、山には格別の文學の要求も無くて、有れば有るなりに元々信じた様に、其傳説はつて居た場合の多いこと、是が即ち第三の理由であつた。細かく考へて行くと其他にも、まだ幾つかの特色は擧げ得られる。たとへば山の人の一様に寡黙で、話術の劣勢を自識して居ることも、問へば答へるといふ程度に山の話に簡明にして居る。土地を著名にし掛茶屋を繁昌せしめようといふ計量が、底に潜んで居なかつたのは勿論、單に聴く人の眼の色を讀んで、もつと面白がらせようといふ當座の野心すらも、



此方には常に缺けて居たのである。正直な記録ならば此特徴は、恐らく讀む人の胸にも到達せずには居なかつたらうと思ふ。

(四)

そこで最後に尙一つの、新たな要件が認められなければならぬのである。低地の傳説には、語る者の種類によつて、効果の差等といふものがさう顯著には現れないが「山の傳説」は最終に之を傳へた者が文士であり、讀書家であり、乃至谷底に住む當の本人であることによつて、幾通りにも味が變るばかりか、時としては正味が稀薄にもなり、又逸散することすらも想像し難くない。短く切れ／＼に又口不調法に残つたものゝ中から、我々の智識の響安に取入れる材料は、殊に珍重して之を輸送する必要があるであつたのである。同じ山中の住民といふ中にも、下に降ることを職業とする者と、嶺に往來して生計の道を立て、居る者とは、近代は一層二色の趣味が對立しようとする姿が見える。誰から聴いても山の話は一つといふことが、今は殆ど成立たなくなつて

居るのである。それだから山と漁村とに於ては、どんな人が話したかゞ一段と重要になり、又如何なる時と場合に、其話が出されたか、同じく附記して置く必要を生ずるのである。私は最近に此一文を草する爲に、思ひ出して本棚の隅から、六年前に買つて來てあつた、セルソールの「西部アルプスの口碑集」を出して讀んで見た。瑞西のヴォーといふ州の村民の昔語りを、土地の僧侶かと思ふ人の集めたものである。私は久しい間かの山地を旅行して、書中の村の名などは殆ど皆知つて居るが、悲しいかな、それは電車や自動車の中から見ただけで、しかもこの話は大部分土地の方言で話されて居るものであつた。斯ういふ驚きと歎息とは、尙我國內でも屢々くり返さねばならぬことと思ふ。本物のアルプスでは人も知る如く山の上遙かに大いなる夏の小屋があつて、村の男子の大多数は牧牛の群を連れて、年の半分はそこに行つて泊るのである。後には少しづつの耕作が其周圍に行はれ、淋しい小さな部落が出來て居る處もある。天然の威壓が殊に烈しい爲に、平地で得られない一人一人の實驗も多く、それを又生涯牢記して、聴かれ語らうとする老人が少なくなかつた。口碑は數百年の間、かゝる人々によつて保管せられ、シャレ(山舎)は即



ち又其交換所であつた。日本の農民はいづれの民族よりも、殊に群住を愛する傾きがあつたやうであるが、それでも猶奥山家には此類の孤獨があり、又別に獵人などの、隣を欲せざる一つ家の生活があつた。それが悉く現代の交通革命に由つて、急速に消え去らんとして居ることは、アルプスの酪農國よりも更に甚だしいものがある。「山の傳説」の新たなる喜悅を知つた者は、すぐに急いでこの失はれ行くものを取留めなければならぬ。それには又この著者の採集法に對して、或は稍嚴峻に過ぎたる批判を下す必要もあるかと思ふ。私の現在興味を感じて居る問題は、山の一つの脅威たる大人の存在と、里で夙より説話化した巨神譚とが、境も紛はしく混亂しようとして居ることである。サヴォアやスイスに於てガルガンツアと謂つて居る大人も、やはりこの二種新舊の經驗が、誤まつて同じ起原の如く語られて居るものゝやうであるが、大きいと謂つても大きさが實は非常に違つて居た。それから今一つは黄金の雞、山で夜中に時を告げる聲を聴くといふ話も、亦本家のアルプスの方にあつては、明かに雞を生きながら、山に埋める信仰が原因のやうに言つて居る。日本では今は里中の塚城址にも流布して居るが、是などは本來多分は山の傳説

であつたといへる。さうして國を隔てた此一致が見出さる以上は、假に發生は人が住むやうになつて後であらうとも、種は潜んで遠き我々の神世からあつたのである。傳説の他の多くの昔話と異なる點は、それが少なくとも或昔に、確かに有つた事として信ぜられて居たことである、さうしてその最も信じ難きものから、次々に遠い神世に押送つて居たことである。一度はあつた事であるが故に、理由があり又法則があり、更に又計畫があつたと考へられたことである。

神世よりしかなれこそ

うつそみも妻を争ふらしき

斯ういふ風に我々は嗟歎して、その有り得べからざるものを聴かうとしたのであつた。今日我々の知りたいと思ふのは、傳説そのものゝ珍らしさでは無い。傳説はほんの僅かばかり諸國の例を見て行けば、直ぐに人はその型の一致し一定して、特に例外の少ないことを見出すのである。それを我々の如く食つて尙集めて見ようとするのは、多くの比較によつて始めて「之に對した古人の心」がわかるからである、故にさういふ資料として精確なるものを供給することが、もし採集



の目的であつたならば、それこそ多々益々辯ずである。青木君の「山の傳説」が大いに人に讀まれ、此上にも更に數篇を重ね行かんことは、自分は大いに此條件の下に歓迎するのである。(昭和五年六月二十八日箱根小涌谷に於て)

## 自序

山、又、山のはるけき彼方——千古の雪を輝かして聳へ連なる、日本アルプスの峻嶺こそ、私たちのあこがれの聖地だ。そこには、山靈が咲き出でた如くに、とりどりに美しい高山植物の花が咲く、可憐なる動物が棲息する。そして多くの傳奇を秘めて居る。

山はこの世の清淨の聖地だ。山は私たちの魂を淨化する、山は尊い、そして靜けく偉大だ、久遠の神祕だ。山は私たちを招く。私たちは山靈の魅惑に泣く。

山の傳説の最初の出發は、山岳出現からはじまつて居る。それから山の成長、山の動き變化、やがては久遠の處女峰の最初の登行者、山岳禮讚と山神の崇拜——かくて、山岳の怪異や魔物、動物、植物の怪異、そして、やがては山村に住む人々の上に、いろんな傳説が生み出される。



それは、無稽な虚偽な物語りのやうではあるが、傳説の中には山の成因、變化、歴史や宗教史が秘められて居るのだ。私は、山男たちから、山に住む人々から直接に聞いた口碑、古文書などに秘められた口碑をあさつて、こゝに山の傳奇話を集めた。

x

山に登る人々、山にあこがれる人々にこの山の傳説を捧げる。山の原始林の中の天幕のほとりで読んで貰つてもよい。騒音の都會の中で、はるけき山をしのんで読んで貰つてもよい。

x

日本アルプスの秀嶺へ思ひは走せる。さんらんと雪を頂いて輝き渡る山々、赤銅に、紫に、深紅に、無限の神秘的な色彩を變化させて山に媚びつゝ動く雲——山こそ私たちの靈場だ、聖地だ。山は尊い、山は美しい、山が秘める傳説は限りなく神秘だ。

x

私はさらに稿を更めて日本アルプスの殉難史、山の民話、開拓史、山の案内者のなつかしい姿、色美しい高山植物——などの山に秘められた多くの物語を集めて出版すること

になつて居る、この書と共に愛して戴けば私の感激であり光榮である。

昭和五年夏山開き近き日

著者しるす。



目次

北アルプス篇

白	鷹(立山)	三
黒	百合(立山)	六
材	木坂(立山)	一〇
弘	法清水(立山)	二
み	くりが池(立山)	三
○	千蛇ヶ池(立山)	六
室	堂(立山)	一八
亡	者宿(立山)	二〇
法	華部落(立山)	二三
釜	ヶ淵(立山)	二五



仲	語(立山)	三〇
山の洗禮	(立山)	三一
小石を積む	(立山)	三二
永久の謎	(劍山)	三三
高山町の祭	(飛驒高山)	三四
黒部傳説	(黒部峡谷)	三五
○黒部川の主	(黒部峡谷)	三六
祖父谷・祖母谷	(黒部峡谷)	三七
十六人谷	(黒部峡谷)	三八
平家の村	(黒部峡谷)	三九
黒雜川傳説(一)	(黒部峡谷)	四〇
同	(二)(黒部峡谷)	四一
鐘釣温泉	(黒部峡谷)	四二
愛本橋	(黒部峡谷)	四三

船	橋(黒部峡谷)	四四
佛石の茶屋	(黒部峡谷)	四五
猫	又山(黒部峡谷)	四六
○岩魚と蛇	(黒部峡谷)	四七
大櫻草	(白馬岳)	四八
山之坊	(白馬岳)	四九
蓮華温泉傳説	(白馬岳)	五〇
○姫川傳説	(白馬岳)	五一
蓮華温泉緣起	(白馬岳)	五二
姫川由來	(白馬岳)	五三
山うばの里	(白馬岳)	五四
雪	女(白馬岳)	五五
晩秋の山の宿	(白馬岳)	五六
里人の古説	(佐々良峠)	五七



タラの木様(有明山)	一三三
脊のび(有明山)	一三四
山鳥の征矢(有明山)	一三四
正福寺の不動明王(有明山)	一三八
神籠石(有明山)	一九九
信の宮(有明山)	二二二
仁科氏の城址(木崎湖)	二二三
難志橋(島々)	二三四
梓川のお里(梓川)	二三四
秀綱の死(徳本峠)	二四二
旅人と小狐(徳本峠)	二四三
神渡り(仁科湖)	二四六
刈間村の櫻(大町)	二四七
神垣内(上高地)	二五〇



櫻の精(上高地)	二五一
遊女の碑(針の木峠)	二五四
ザラ峠の新史實(針の木峠)	二五八
借り女(針の木峠)	二五九
穂高神社(穂高岳)	二六二
公安さま(穂高岳)	二六五
お玉柳(穂高岳)	二六七
若宮明神(穂高岳)	二七〇
満願寺の小僧火(穂高岳)	二七五
山上の池(焼岳)	二七七
牝牛の死(青木湖)	二七六
幡隆上人(槍ヶ岳)	二八〇
二子岩の假小屋(槍ヶ岳)	二八二
巨人の足跡(唐松岳)	二八三





天安鞍(乗鞍岳).....	一八八
入山邊の湯(王ヶ鼻山).....	一八七
燕の糸(燕岳).....	一八九
長兵衛ヶ池(常念岳).....	一九〇
雷鳥(御嶽).....	一九二
阿古太丸の塚(御嶽).....	一九三
興禪寺の檀家(御嶽).....	一九四
兄妹地藏尊(御嶽).....	一九八
縁結びの木(御嶽).....	一九九
お六桶(御嶽).....	二〇〇
寢覺の床(御嶽).....	二〇一
佛法僧鳥(御嶽).....	二〇九

中央アルプス篇

天津速駒(駒ヶ岳).....	二一五
濃ヶ池(駒ヶ岳).....	二一八
義犬塚(西駒ヶ岳).....	二二〇
駒ヶ池(西駒ヶ岳).....	二二六
炭焼小屋の娘(西駒ヶ岳).....	二二七
熊狩(西駒ヶ岳).....	二三〇
墓所に立つ女(寶剣山).....	二三三
手塚の里(大念岳).....	二三四

南アルプス篇

足利調伏(赤石岳).....	二四〇
大小寺平(赤石岳).....	二四二
猿(赤石岳).....	二四三
赤石の名(赤石岳).....	二四五



山	椒	魚	(赤石岳)	二四五		
眞	菰	ヶ	池	(高鳥谷岳)	二四七	
高	遠	の	繪	島	(伊那)	二五一
蹄	の	跡	(東駒ヶ岳)	二六七		
大	御	鞍	石	(東駒ヶ岳)	二七〇	
諏	訪	明	神	(鹽見岳)	二七二	
雪	の	夜	の	女	(鹽見岳)	二七三
虛	空	藏	山	(鹽見岳)	二七五	
逆	銀	杏	(鹿鹽浴場)	二七六		
祈	禱	柱	(鹿鹽浴場)	二七六		
戸	臺	部	落	(仙丈岳)	二七八	
原	始	部	落	(十國峠)	二七九	
蛇	ヶ	淵	(三岳)	二八二		
農	作	醫	(白峰山)	二八三		

奈	良	田	村	(白峰山)	二八三	
大	日	岩	(鳳凰山)	二八七		
地	藏	岩	(惡澤岳)	二八八		
白	雪	の	山	容	(農鳥山)	二八八
雪	が	生	む	名	(白峰山)	二八九
金	賣	吉	次	(神坂峠)	二九〇	
手	力	男	命	(冠着山)	二九七	
背	く	ら	べ	(八ヶ岳)	二九六	
南	の	家	(八ヶ岳)	二九九		
○	大	蛇	昇	天	(八ヶ岳)	三〇二
女	夫	松	(八ヶ岳)	三〇四		
本	澤	温	泉	(八ヶ岳)	三〇五	
姫	湯	(八ヶ岳)	三〇七			





山の傳説

日本アルプス篇





燕岳から見えた槍ヶ岳



# 1 北アルプス篇

## 白 鹿 (立山)

北アルプスの盟主立山——山頂には昔天廣楯といふものがあつた。その楯を敵に向けると敵兵の大小によつて伸び縮みをするといふ楯である。

立山を開拓した傳説は、次のやうに傳へられて居る。

大寶元年二月、佐伯尉有若卿は、越中の大守に任ぜられた。文武天皇は越の國の鎮定に御心をなやまされてゐたが、智力に富んだ者よりも有徳の者と思召して、とくに有若卿を選抜して越中の大守に任ぜられたのである。

卿は勅命を奉じて旅の仕度をととのへ越の國に出發した。國境の險、クリカラ峠まで差しかゝ



ると、白鷹が飛んで来て卿の手にとまつた。

卿はその鳥をめで、越の國に入り、善政を施した。

二三年の後、卿の子息の有頼は、父の留守中に鷹狩にいつた。その時、父が愛してゐた鷹を連れていつたのだが、放つた鷹は、空遠く飛び去つた。

父の怒りが恐ろしかつたので、鷹のあとを追ふと、やがて彼方にその姿を認めた。

「歸つて来よ」と金の扇で招くと、鷹は歸つて来た。

その時、草の茂みから、出しぬけに熊が飛び出した。鷹はそれに驚いて、再び空に舞ひ上つた。

有頼卿は熊に向つて矢を射つた。矢は熊の月の輪に命中し、凄唸りをあげ、血を流しつゝ、

鷹が飛び去つた東の方を目がけて逃げ去つたので、卿もあとを追つた。

夕方になつたので、卿は蘆の中で一夜を明かした。翌朝、八十ばかりの老翁が三人現はれた。

「逃げ去つた鷹は立山の方に行けば捕へられる。が、山は深い、困難が伴ふ。命を賭して分け入らねばならぬ」と、翁たちは教へた。

血氣な卿は、山また山と分け入つた。そして、七日七夜の後、室堂に達して岩谷に入つた。

卿はその夜靈夢を見た。

山へ行くと教へた三翁は彌陀、釋迦、大日の三體が、假の姿を現はしたものであり、熊は阿彌

陀如來。鷹は不動尊の化身であることを知つた。

尊い佛に弓をひくなど、申譯のないことをしたと思つて、割腹しようとした。

そのとき、峰に紫雲が棚ひいた。そして、その中から、尊い聲がした。

「はやまつてはいけぬ、お前の來るのを久しく待つてゐたのだ、この山を開くがよい。」

卿はかしこんで三年間、山にこもり、九品の淨土、百三十の地獄などをきはめた、自身で彌陀

釋迦、大日の三體を彫んで外の六十六體とともに、姥堂に安置した。

三年後に山を下つて、父の有若卿を通して天皇に言上した。

「來世のために必ず開け。また、朕の國家の道場としよう」と宣まはせられた。

有頼卿は再び山にこもり、名所に堂宇を建て山々を開いて、八十三歳で入寂した。



## 黒百合（立山）

立山には黒百合の花がさく。その黒い毒々しさは、なんだか「咒」を暗示して居るやうに思はれる。

昔——富山の城主佐々成政に早百合といふ愛妾があつた。彼女は美しかつた、眞白なはだは丁度眞珠の様であり、烏羽玉の黒髪には、女の蠱惑的なほひをふくんで、兩のひとみはぼたんの様にぼつと染つてゐた。成政はたゞ熱愛して居つた。

早百合はやがて妊娠をした、喜ばねばならぬ成政は亂暴で嫉妬心の強い本能を現はして彼女が竹川熊四郎といふ小姓と通じてゐるといつて、遂に竹川と早百合はいふまでもなく、その家族の者までも神通河原で惨殺してしまつた。

早百合は血に染まり、髪もおどろに振亂した物すごい姿で成政をにらめつけて、

「もしも立山に黒百合の花がさくやうな事があれば、それは私の怨みです。のろひです。きつと

貴方を亡ぼしてしまひます」と、斷末魔の苦悶の中から叫んだ。

しかし、成政は氣にもかけなかつた。

その後、天正十六年の夏——成政は秀吉の機嫌を損じたので、北の政所にとり入つて、機嫌をとりもどしてもらはうと思つて、歡心を買ふために何か珍らしいものとして、家來を立山へ遣し、探して來た黒百合を青竹に入れて北の政所に獻上した。

見たこともない、その黒百合の一種特別な魅力に北の政所はひどく満足した。すると淀君がそれをみて、非常に不平を起し、自分にはくれない成政をうらみ、秀吉に成政をさん訴したので秀吉はそれを信じて、成政をしりぞけてしまつた。そして前田、上杉の軍をさし向けた。

佐々成政は、富山の居城にあつて前田、上杉の大軍を左右に受けて戦つたが、敵は多い、味方はあまりにつかれ果てた。すでに弓矢もつきて城の運命もせまつた。

天正十二年十一月三日——北陸は猛烈なる吹雪が荒んでゐた。その吹雪を目して近習の建部兵庫、松澤新助を初め五十餘人を従へて城をすて、立山へのがれ更に信濃路に落のびるべく城を脱



走した。

立山は名に負ふ嶮山である。かて、吹雪が荒んでゐる。嶮な山道にかゝると、吹雪のため道は没し、行手は定かならず、さすがの成政もどうすることも出来なくなつた。

夕暮は近い、寒さは襲うて来る、雪は益々降りしきり、風さへも加はつて来る。

「われら、かく、深山に迷ひ込んで雪中に空しく凍死するのも宿世の縁だ。」

成政は絶望に似た吐息を洩らした。

一行はそれでも漸く一つの岩窟を發見し、かたまりあつて吹雪のをさまるのを待つた。

深山の吹雪の夜は戦ひに破れた將卒に不安と悲哀をのみ感ぜしめた。今は、歸依する名號の尊體に念佛して吹雪の晴れるのをひたすら祈るより外すべがなかつた。

夜はほのぼのと明けてゆく、風はやんだ。雪も晴れた、空は赤く燃えて御來光の色が山上山下の雪にも流れた。

その時、どこから來たのか一匹の鹿が現れ岩のほとりを歩きまはつてゐるかと思ふと東方さし

て走り出した。

「必ず御佛の導きに相違ない。」

成政は信じた。疲勞の身を起こし家臣を促して岩窟を出た。太陽はさんらんと輝いてゐるのだ。勇み立つた主従は山道の雪の上に残る鹿の足跡を辿つて歩き出した。

やうやくのことで野口の里(平村)に到着した。が、家臣の松澤新助にはかに病が出て動けなくなつた。氣の毒ではあるが場合が場合なので成政は残つた食糧の栗と秘藏の名號を與へて再會を約し涙をのんで袖を分ち、黒部の嶮所へ進んだ。

新助は野口の里で病氣を養つた上、主君のあとを追ふべく従者の肩にすがつて雪道を歩き出した。そして、來馬の里まで行つて富山の城が陥落したことを知つた。しかも、主君の行方は分らなかつた。

病は急に重つて新助も山峽の雪の里で死んでしまつた。従者の仁助は成政が新助に與へた名號を小さな堂を建て、祀つた。西方堂と名づけた。名號は越後流罪の際親鸞上人が書いたものだ。



いよ。

栗を西方堂のほとりに植ゑるとすくすくと成長した。そして、年に三度花が咲いて實つた。今は朽ちた株ばかりが残つてゐるが、新助の後裔松澤屋四郎の家は榮えてゐる。

だが、西方堂は永祿年中に焼けた。炎につままれた堂の中から名號は白鳥のやうに飛び去つて白馬岳の麓、姫川近くの林の中に火をのがれた。

今の西方堂はその後再建し名號も林の中から持ち歸つた。名號の飛んだところを光明と名づけ部落となつてゐる。

尙、成政が早百合を殺した富山の神通川の本榎を三まわりすると、夢のやうに凄艶な早百合が哀しい姿を現はすといわれ、呪ひの黒百合は今も立山に咲く。

### 材木坂（立山）

立山の登山道、藤橋を渡ると禁獵區、その急坂をよちると、これから、打開される高原へ出る

までの長い坂道を材木坂といふ。

そこには六角柱状の安山岩が、恰も材木のやうに縦横に横はつて居る。

昔——女人格界の靈山に堂を建てやうと念願した美しい女があつた。山坂をもものともせずここまで柱を運んでおいた。

ところで若狭國小濱からはるばると登つて来た比丘尼止宇呂がこの柱を跨いで通つた。不思議な夜が明けると柱の木質は化石してしまつた。

それから、材木坂で啼くひぐらしは止宇呂供養のかねを叩くやうにかなかなかと啼く、又、うぐひすは止宇呂供養の經を讀むやうにほうほうと啼く。

### 弘法清水（立山）

弘法大師が立山に登つた時のことである。

行けども行けども険しい坂——大師は疲勞をおぼへた。ことに、咽喉がかわいた。



けれど彌陀ヶ原の餓鬼田にさへ草も生えず魚も住まぬ位だから山道には飲み水さへなかつた。大師は心靜かに彌陀を念じた。そして金剛杖で地面を突くと、不思議、こんこんとして清澄な水が湧き出て來た。

大師は咽喉をうるほした、そして、後の世の登山者のために、水のつきないことを念じて再び登山道を進んだ。

今も彌陀ヶ原の弘法小屋の宿に着く登山者が、何よりも有難がる眞清水こそ、大師が残してゆつた水である。

### みくりが池（立山）

立山の地獄谷へ行く山徑の左にはミクリが池がある。

周圍凡そ七町、水面までの急勾配には榎松、樺柏眞、みやまはんのき等が垂下つて居て池の水は紫色である。

元和六年四月のこと、まだ、池のまわりには雪が深かつた。

池のほとりの室堂に延命坊といふ僧がこもつて居た。

ある日、越前の山伏小山坊が山に登つて來たので附近を案内した。

「この池は夏でも水は氷のやうに冷たいのです、底も深い、物凄しい池です。」

延命坊が説明すると小山坊は苦笑した。

「こんな池がなにが凄いです。」

「それ程に仰るあなたでもまさかこの池に飛び込むことは出來ないでせう。」

延命坊もしやくにさわつたので皮肉つた。

「わけのない事、こんな小さな池に飛び込む位ひ。」

負けぬ氣の小山坊は直ぐに眞裸となつた。そして口に劍をくわへて池の中に飛び込んだ。紫色の池の面に白波が立つた。

小山坊は池の中を泳いだ。一周、二周、三周した。



「美事でござる。しかし、御坊は口に劍をくわへておられる。魔を怖れるためでござらう。」  
延命坊は云つた。

「劍——よろしい、それでは今度は劍をくわへずに泳いでごらんに入れやう。」

小山坊は劍を預けて池の中に再び飛び込んでゆつた、抜き手を切つて更に三周した時、彼の身體は池の底に引つ張り込まれるやうに沈んでゆつた。

延命坊も驚いた、あわて、佛に念じた、すると小山坊の姿が水面に浮び出た、その時はもう断末魔の死相が現はれ力なくまた沈んでゆつたきり、もう二度と姿を見せなかつた。

池の面はもとの静寂にかへつた。

「悪い事をした。」

延命坊は悔ひた、そして、小山法師の菩提を吊ふために下山し、四月十日深い穴を求めて入り暗い穴の中で三年間籠をたゝいてやまなかつた。同じ四月十日になると籠の音は止んだ。延命坊は落命したのである。

池には大蛇が住んで、小山坊を底に引ずり込んだといわれ、風もない時に常に小波がたつのは大蛇が水中で呼吸して居るのだとも傳られて居る。

延命坊が落命してから二百五十年を経過して明治五年、常願寺川の大地震、山崩れ、大洪水となり、延明坊の塚はその時押流され、基標丈が拾はれて、今は後裔の岩崎寺佐伯治重氏方累代の墳墓となつてゐる。

地獄谷は周圍十町許りの谷で、東西に長く、ミクリガ池から浸出てくる雪解水が一大焦熱地獄の上を東と西とに分れて落ちて行く。その間に大小無数の氣孔があつて硫氣を噴出してゐる。巨岩を揺るがせて噴騰する阿鼻叫喚、天に冲する黄煙、慘然として硫黄を扮飾するもの、冷水や灰土の中で煮沸するもの、灰濁の中に氣泡を揚げてゐるもの、様々である。銅冶屋地獄といふのはその洞を上空に向けて、ヴルカンの穢もかくぞとばかり、獅子吼してゐる。また紺屋の地獄といつて川の淵に硫酸銅色の怪奇な渦巻を毒々しく煮返してゐる。釜のやうな泥土の壁の中にぐつぐつと鍋を煮てゐるのが圓子屋地獄といふのだらうか、百姓地獄といふのだらうか。その他、無



間とか、八満とか種々の名がついてゐる。草鞋の底から傳はる熱氣と、胸を壓する硫黄臭い瓦斯とで、氣持が悪くなる。中に毒瓦斯を噴く所もあり、過つて死んだ人もあるさうだ。

千蛇が池（立山）

立山に登るには、越中畠山から往復五日を費さなくてはならぬ。立山と一概に呼ばれて居るが雄山、大日、大汝、劍山、別山、淨土山からなつて居る。

その雄山の頂上に近いところに昔千蛇ヶ池といふ物凄しい池があつた。今は、一面に雪田となり夏はお花畑も美しいが、大昔は藍を満々と湛へたやうな水面に、峨々たる四方の山容を映す恐ろしい山池であつた。

池には澤山の太蛇が棲んで居た、怖ろしい太蛇は絶えず山を下つては、越中の國に行つて人を殺し家畜を盗んだ。

雄山権現はこれを非常に敷かれ、どうにかして、人を助けてやらうと考へられた。

いろ／＼と思案の末に、ある日、池の大蛇どもを神殿に集めて、

「おまへたちが今のやうに里に下つて數多の人々を喰ひ荒して居ては、やがてはこの世には人間の種が盡きてしまふであらう。さうすればお前達の食物が無くなつてしまふ。お前達も自分の身を思ふなら、わしが今日種子を與へるから、芽を出すまで待つて居てはどうだ、それまで待つては人間が殖えるから従つて食物の盡きる心配がない。お前達はその方が利益だ。わしの云ふ事が分つたら、この種子をもつて行つて好きな處に蒔いて芽の出るのを待つてゐるがい」と、諭した上、名も知れぬ深山の草の種子を大蛇共に頒け與へられた。

大蛇共は成程と思つて、草の種子を貰つて引下がつた。そして日あたりのいゝ所に種子を植ゑて雄山権現の言葉通り池の中にひそんで芽の出るのを待つことにした。

雄山権現は、四方八方に散らばつて居た大蛇どもが残らず池の中に這入つたのを見て安心した。そして池の上に大雪を降らして池を閉ぢて大蛇共を雪の底に封じ込んでしまつた。

雪は大雪溪となり、大蛇共が植ゑた種子は、紅紫とりどりに美しく咲くお花畑となつた。



室 堂（立山）

立山に室堂がある。これは前田藩時代に建築されたもので一尺四方もある大柱が無数に立つて居る、是は冬期の積雪を防ぐ爲めだと云はれて居るが、とにかく高山上に於ける建築としては日本一である。

その室堂の建築にまつはる奇しき物語が残つて居る。越中から百人近くの石工がこの工事に雇はれて来て居つたがその中に吉次郎と云ふ若い男があつた。彼は晝間働くときも夜石工小屋で眠つた時にも別れて来た女の可愛らしい瞳が、彼の眼底に焼つけられたやうに離れなかつた、山から下る時には賃金を澤山に持つて歸つて戀しい女と世帯を持つ約束で此の山に登つて来たのであつた。

ある夜のこと納屋頭は例の荒い農丈な手で無器量な大きな煙管に刻煙草をつめながらみんなに明日は山のすぐ下にある入道雲のやふな大岩を割ることを命じた。此の岩は奇な形を見たゞけでも、なんとなくいやな氣持のする岩だつた。

吉次郎はこの工事に雇はれて来た當時からこの大岩に對して、なんと言ふ事なしにいやな豫感に囚はれて仕方がなかつた。毎朝その傍を通るたびに、何となく、ひし／＼と迫つてくるやうな騒しい勢を感じて居た。明日の仕事を楽しむやうに小屋から元氣よく出ていつた。入道岩の怪奇な姿を見上げて立つた吉次郎の顔には、何時になく殺氣が漲て居た。眼にも唇にも、決死の色が漂つてゐた。さうして打込む彼の槌の威力は餘程凄じかつたがさしもの魔の岩も眞一文字に裂け大岩はガバツと蝦蟇のやうに裂目を開いた。その瞬間「あッ」といふ悲鳴とともに秘藏の槌が裂目の奥深く落ちた。思はず岩の裂目を見て逆上した吉次郎は何の思慮もなく、それを取戻すために岩の裂目に入つた。その刹那岩の裂目は俄かに「グツ」と口を堅く閉ぢた「大變だ！ 吉次郎が入道岩に狭まれた」一人の石工は消魂しい叫び聲を出した。一同混乱した激しい恐怖と戦慄とが彼等の脊筋を針のやうに突つ走つた。

今のいまゝで大岩を砕く、物凄じい、音をたてゝゐた槌の響と、石壁の音は、はたと止んだ。



やがて入道雲の大岩は美事に栢榴の實の破れたやうに眞一文字に裂けその新しい裂目に藍あるのか無念の焰に息吐いて居るやうに眞一文字に裂けた奥からは夥しいドス黒い血がたらたらと流れてゐる。しかし何故か吉次郎の姿は見えず聲も聞えなかつた。人々はこの光景を目撃してブルブル顫るのみであつた。氣丈な老納屋頭の下知でやがて五六十人の石工が岩の肌を打込むの響は凄じいまで山に響した。友のため復讐に燃えた石工等の眼は血走り、逞い腕には渾身の力がこもつてゐた。

岩はのみの一撃を食ふ度に吉次郎の身體を更に深く締め込でまへより一層烈しく、裂目から滾滾として滴たる血汐はどうする事も出来なかつた。

魔の岩は其の後石工の手に碎かれて今はもう見る事が出来ない。

### 亡 者 宿 (立 山)

明治初年のことである。

その春、最愛の妻を失つた荷車挽の三吉は、草の葉蔭に轟すだく初秋のころには亡妻を慕ふ情いよいよ濃く、大事な稼業をさへ捨てて終日ふさぎ込む日が多かつた。

近所の人々はそれを氣の毒に思つて、五兩の金を工面して三吉に持たせ、死人に逢へるといふ立山の亡者宿へやることにした。

三吉は躍り上つて喜び金澤城下の在、大橋村のわが家を出て立山へ急いだ。

一心にゆく足は早く、金澤から立山下まで二十三里のみちを突破してまだ日の高いうちにアシクラ村へ着いた。亡者宿はすぐわかつた。草鞋も脱がすにまづ訊ねた。「この春死んだ俺の女房に逢ひに来た、逢はしてもらへるか……」「ええ逢はれますとも」——宿の亭主は受けあつてすゝぎをすゝめ部屋に請じた。

夕食がをはると、そこへ亭主が顔を出して、お禮やらお悔みやらを長々と述べたのち、死んだ人の人相をきいた。三吉は、「脊のすらりとした、色の白い、面長の目鼻のキリツとしたい、女房でござりました」と目に涙をにじませて語つた。亭主は「それは何とも御愁傷のいたりで……」で



は明朝夜の引明けにお逢はせ申しますが、それにはいま申すことを神かけて守つていたゞかねばなりません」「はい、あれに逢へることならどんなことでも守ります」「いやさうむつかしいことでも、つらいことでもないのですが、明朝まだ暗いうちに宿の人夫に案内させます、そこは少し登つたところの野原ですが、そこに坐つて夜明けを待つのです。すると引明に前面の高臺を死なれた奥様がとほられます。そのとき見るのです。しかし聲をかけるとその人の成佛を妨げるばかりでなく、妾もすぐ消えますから聲を出さず黙つて見てゐて下さい」そいふ話がかはされて亭主はその席を去つた。

三吉は床へはいつたが眠れなかつた。やがて夜はしら／＼と明けて來た。三吉は人夫に案内されて山に登つた。そして野原のやうなところまで來ると、人夫は「ではこゝでお待ち下さい、聲を出しては駄目ですよ」といつて、三吉を残してどこへか去つた。

やがて冷たい朝霧が四邊にこめて日の出に間のない曙光が加すかに射した。と、目の前の丘を白衣を纏ふた女が小走りにとほりかけた。まぎれもない死せる女房であつた。三吉は昨夜宿の亭主との約束も忘れて「お、……」と叫ぶが早いか飛鳥の如く走つて女の裾をつかんだ。胸をおどらせながら……。

「お許し下さい。妾は亡者宿に賣られて心ならずも皆様を欺いてをる女でございます。どうぞお見逃し下さいまし」奇怪にも、女はこういつたまゝ、三吉の手を振り切つてはた／＼麓へ向つて駆けおりた。

法華部落 (立山)

立山をめぐつて飛彈に出づる山道、笹から約一里のところの檜原といふ三百年間、こぞつて法華で覆つた一部落がある。

今はその影さへ認めぬが昔は檜の老樹が枝を交へて繁茂した一面の原であつた。翠嵐満るばかりの山脚には神通の激流が今もなほ滔々として巖をかんで居る。こゝに源氏の重臣畠山重忠にまつはる奇しき傳説がある。



重忠は鎌倉幕府の四天王ともいわれる武將であつた。ある時、將軍頼朝の妻政子がはげしい眼病を患ふた。

犀の生血が特效があるといふので犀を求め使者に重忠がえらばれた。重忠は旅を重ねて立山中の津ヶ淵まで来た。その淵の主は犀だときいたので勇敢な彼は不動明王をきざんだ七首をくわへて底知れぬ碧潭に躍り込んで水底深く沈み、池の主を射止めた。そして犀の生血に三歸明王を刺み生血とともに鎌倉に持ち歸つた。

政子の眼病は全快した、頼朝の信任はいよいよ厚きを加へた。

その頃、將軍に丹後の局といふ愛妾があつた。白百合の花のやうに美しい女である、將軍の寵愛が深いので政子の妬みと憎しみは甚しかつた。

正月四日の酒宴に、愛妾の毒殺を企てたことを知つた重忠は、可憐な局がいたましかつた。遂に意を決して局を連れて鎌倉を脱走することになつた。

猜疑の前には骨肉の愛もない。頼朝は怒つて重忠の邸に火を放ち彼に追捕の軍をさし向けた。

やむなく重忠は單身で逃走して檜原に落ちのび餘生を法華の精進に捧げた。

局ははるばると流浪の旅をつゞけて重忠のあとを慕ふた。山又山を越へてようやく檜原についた時重忠は病死したあとであつた。局も今は生きる望たへて自殺した。

二人の墓は山百合の花咲くほとりに今も残つて居る。

### 釜ヶ淵 (立山)

福島左衛門大夫正則の家來に森宇右衛門正長といふ劍道に秀でた武士があつた。二十六歳の時、福島家は家祿を取上げられ、彼も又浪人となつたので、武術修業を志して旅に出た。

途中、飛驒の船津に知人のあるのを思ひ出したので、先づ飛驒の山越えをすべく常願寺川に沿ふて道を急いだ。

時は寛永二年の八月下旬、正長は一人旅の無聊を感じながら夕暮近くに漸く立山の麓釜ヶ淵といふ處へ着いた。



無論、そんな邊鄙な土地に宿屋などあらう筈はなかつた。正長は或一軒の此村では長者らしい門構への家を訪づねて一夜の宿を乞ふた。すると、快く許して洗足の湯や何彼と町重な待遇をするのであつた。

與へられた離座敷の一室に、女中のすゝめる膳部に箸をつけながら、正長はそれとなく此家の主人のことを訊いて見た。主人は醫者で、黒瀬太伸と呼び、靈藥を製造しては京都、大阪までも手廣く賣出してゐるといふ。

その夜更け、正長は寢に就かうとしたが、ふと戸外を見るとあまりにいゝ月夜なので急に寢るのが惜しくなり、廊下の草履を穿いた儘そつと庭へ下り立つた。

廣い庭を彼方此方と歩いてゐるうちに、次第に樹木が生え茂つて林のやうになつて來た。すると、其處に滑り戸があつて、戸の外は幅二間もある深い濠になつてゐた。そして、濠の向ふには高い塀がうね〜と張めぐらされてある。それを見ると、正長は不審を打たずには居られなかつた。長者とはいへ醫者にしては邸宅の造りが豪者異様なばかりでなく、邸内に又塀を設けたり、

深い濠をめぐらしたり、何かは知らず此邸には秘密を包むやうな不氣味なものがある。好奇心が正長を狩立てた。

彼はエイといふ氣合諸共、二間の濠を飛び越えた。そして第二の高塀をも同じ氣合ひで見事乗り越えて了つた。

そこは一層不可解な光景だつた。地形が急に低くなつて谷間の如く、月は明るく照りながら蟲も啼かぬ靜寂さ、しかも何となく膚に粟を生じるやうな不氣味なものが四邊をこめてゐる。

正長は思はず腰の一刀を取直した。

下り坂をものゝ一丁も來た時である、ふと、四邊の靜寂を破つて人の悲鳴に似た聲がした。はつと思つて立停ると、又、扇を裂くやうな悲鳴——しかも今度は明らかに女の聲である。

「おゝ、これは只事でない。」

正長は聲のする方へ駆け寄つたが、其處には又しても高塀が行手を塞いでゐた。しかも今度は一丈五六尺もあらうといふ殿めしさである。流石の正長も是には當惑した。が、塀内から聞こえ



て来る悲鳴や、その他にも洩れて来る絶えぬの呻めき聲などを聞くと、今は躊躇してゐる場合でないで腰の一刀を扉に斬込み、その隙を目がけてウンと金剛力に蹴破つた。扉は漸く人の潜り込める位に穴が開いた。正長は脱兎の如く内へ躍り入つたが、その扉内の光景の何といふ怪奇、凄惨さ！立木にくもりつけられた裸身の女、大石の下に押し潰されてゐる男、さては頭を割られ、胸を裂かれた血みどろの死體！そしてさうした惨たらしい死骸が果々山をなす悲惨、凄絶。

正長は素早く女の繩を断ち切り、助け起して色々訊くと、女は越前敦賀の漁夫の娘で、悪者に誘拐され、二日前に此處へ賣られて来たのであつた。この黒瀬太仲といふ醫者は、かうして諸所から幾人となく人を買入れてはその膽を抜き取り、心臓を掴み出し、或は石を載せて押し潰しては其脂を搾つて色々々の薬を調製してゐるのだといふ。正長は自分も今頃熟睡してゐたら、それこそ此大石の下に押し潰される運命だつたかも知れないと思ふと、流石に剛氣な彼も覺えず慄然として顔色を變へた。

やがて正長は女を授けて瀆の處まで引返した。すると、急に四邊が騒がしく、大勢の入り亂れた足音と共に口々に罵りわめく聲が聞えて来た。正長を討取るべく探しに来たのであらう。技に於て彼は、身の危険を免かれるためのみでなく、悪醫師の毒牙に斃れた幾多の人命の回向のためにもこの太仲を斬つて捨てやうと決心し、女は其處へ残した儘再び瀆を飛越えた。

太仲は正長が秘密の場所から飛出して来たので「さては悪事露見」と目を瞞らし十人ばかりの手下に下知して一度にどつと打つてかゝつた。

だが正長は劍道の達人、相手の多勢に怯むところはない、忽ちのうちに五六人を斬つて捨て、逃げようとする太仲にも遂に再起の出来ぬ重傷を負はせた。

餘の者は、太仲が斬られたのを見ると我勝ちに逃げ出して了つたので、正長は血刀を提げながら母屋の方へ来て見ると、何時の間にか此騒ぎを知つたのであらう。女中その他の奉公人達は夫々家財を持出して運電した後であつた。



夜が明けてから、村人に頼んで早速代官所に訴へ出で、かの娘は漆に橋を渡して投げ出したが役人の調べた處によると、是迄太仲の毒手に罹つて命を落した者は幾許あるか知らず、堀内に投げ捨てられた死骸や白骨の山など今更に此悪醫者の罪惡をまさしくと物語つてゐるのであつた。

仲 語 (立山)

立山では山の案内者のことを仲語といふ。

そのわけは、もと、立山権現を祀つた仲宮村といふのが立山の麓にあつた。こゝには四十八坊が置かれて居た。

明治維新の時、寺と、山のお宮との縁が切れたため、生活に困つた坊の人達はガイドに早がわりをした。

そんなわけでガイドのことをはじめは「仲宮」と呼んだ。それが説明の役もするといふので、「仲語」と呼ぶやうになつた。

山の洗禮 (立山)

大理石で築き上げられた様な、雪の立山も七月の聲を聞く頃からは、追に山裾は薄紫に彩られて銀盤の様に輝いて居た。彌陀ヶ原にも雪は消え失せた、すつと以前は山開きに奉幣使が参向せぬ先は神職や山案内の仲語が登山するに過ぎなかつたものだが、横、板倉氏などいふ登山家が遭難してから冬の立山も俄に有名になり、先頃山の宮様、秩父宮殿下が尊い御身でスキーを御駈り遊ばされてからは、更にスキーの山として世界的名山たる極めを付けらるゝに至つた。斯様にして近年は危険の伴ふ冬季間でさへスキーを肩にした山登りが絶えなくなつたのだから、ましてこれからの山の季節にはどれ位繁昌するかそれは想像に難くない。山に育まるゝ越中の男兒は十二年を呼ぶと同時に一度は必ず山の洗禮を受けなければならぬやうに習慣付けられ、男で立山をふまぬものは男一匹の仲間入りが出来ない位である。それで十二の夏には父親が伴ふか叔父に連れられるか。或は親戚或は土地の若者頭が同道するかして兎にも角にも一度は六根清淨、山の靈氣



に俗腸を洗ふ定めとなつてゐる。

それで若し其の中、山氣に酔うて山を極める事の出来ないものは前生の罪劫深きか、一家一族に悪業邪心のある徴として忌み怖れ末代の耻辱とするのである。

可愛い家の子が立山登りをして居る間は家のものは精進潔齋して大きな聲さへ出すものはない何の差障りなく愛子が下山すると町端れ或は村端れまで一家一行が出迎へてお目出度うくを浴びせかける。下山隊はまた麓の蘆餅で立山權現と赤地に白く刷り出した吹流しを求めて、これを折柄の微風に戦がせて意氣揚々凱旋のやうな晴々しさで迎へられ、家では皆々寄り集うて赤飯の御祝が始まつたものである。

### 小石を積む（立山）

越中の男で鹽峰立山に登らぬうちは一人前とはいへぬとさへいわれて居る。

昔——立山はお隣の加賀の白山よりも、馬の草鞋の厚みだけ低いと越中の人々に信ぜられて居

た。

お國自慢はどこにもある。

「向ふは百萬石、こつちはたつた十萬石でも山だけは取けぬぞ。」

とんだ郷土愛から登山者は必ず麓で小石を一つづつ捨つては絶頂に積んだものだ。

明治になつて測量の結果立山は八百尺も高かつたので越中の人は安心した。

### 永久の謎（劍山）

日本アルプスの大立物のうちで、最後に登られて最も人氣を集めてゐるのは、立山連峰の劍岳であらう。

断崖と絶壁に成り立つた巨岩の山、どこをどう登つていゝか見當がつかない。山容を見ただけで大ていの人が恐れる。

だが、昔から登山者が絶無だといはれてゐた劍岳に、實は早く登山した人があつたのである。



陸地測量部の人達が、この山の絶頂に達したのは明治四十年七月であった。弘法大師ですら草鞋千足を費してなほ登り得なかつたといふ傳説を持つこの山に、おそらく人間の足跡を印したのは自分らより外になからうと信じてゐたとき、槍の穂と錫杖の頭とを發見した。

この事實は、古來登山者が絶無と稱せられてゐたこの山に、いつのころか勇敢な僧侶か山伏が岩を分け大雪溪を踏んで絶頂をきはめたことを語つてゐる。

けれど、それが何人であり、いつのころのことであつたかは知ることが出来ない。又槍の穂や錫杖の頭は、登山者が記念のために残したものか、或は異變のために墮れて、持物だけが残つたのかも分らぬ。

最初の征服者が何人であつたかは永久の謎であるが、それだけに大きな興味を感じる。

### 高山町の祭（飛騨高山）

東から南へかけては日本アルプス、西は加賀の白山、北は越中の立山といふ巨山にかこまれた

小さな盆地を貫流する神通川の上流、宮川にまたがつた平和な町が高山である。

どの方面からこの町に入るにしても山また山をわけ入らなければならぬので、こんな山の中に人家があるかしらと思ふくらゐである。しかし戸數四千以上からあるこの町の、文化は東京あたりと少しも劣つてはゐない、只、汽車と電車がなくらゐることである。

他國から一步足をふみ入れたものは、その平和さや美しさに驚き小京都といつてゐる。實際高山にも東山があり、こんな小さな町にどうしてこんなに寺があるかと思ふくらゐたくさんの寺がある。それほどまた佛教も盛んである。

人々は純朴で、言語も非常に古代めいてゐる、花袋氏が何かの本で高山に美人の多いのには驚いたといはれてゐたが、雪國だけあつて色白の美人の多いのは確かである。

この町の名物は何んといつても春秋のお祭であらう。四月十五日は山王祭で九月十五日は八幡祭であるが、一町内に一臺づゝある山車は實に美事なものである。

さすが飛騨の内匠や左甚五郎を出した土地だけあつて、山車の彫刻なんかお手のものである。



それも祭になつて組立るやうなのではない。二階造りの恒久的なもので、屋根には美事な模寶珠などの飾がしてあり、柱や欄は漆や金具でおほはれ、壁には花鳥や人や獸の彫刻若しくは金銀色で刺繡がしてあつてこの町以外にはないといふ代物である。これを陣羽織を着て陣笠をかぶつた人々が引いて、袴姿の人々が警護をして、町を練歩くのである。山車の中では盛んに笛や太鼓ではやしたて、二階には町内の人々が乗つてゐる。

そして氏神の御輿が古典的な行列に護られて、町の中にある御放所に行かれ、そこへ夕方になると、各山車が集つて来て、

高い山からの谷底見ればの 瓜やなすびの花盛り

あれもよいよいよい これもよいよいよい

といふ歌を節面白く歌ひながら退散するのである。

一度見たならば、その古趣味を大概の人は忘れぬであらう。

高山から數里山奥に入つたところに白川といふ村がある。これが有名な原始郷で、一家には數



自三七頁  
至四〇頁

廿六

調查清九年三月六日





約一里も登つたと思つたところで、親方は腰を下した、そこで一夜を明すことゝなつたのである。

夜が明けて見ると、露营地は深い谷で何處が何處やらさらに見當がつかなくかつた。むろん人家などはなく、樵夫さへも通つた形跡のない淋しい山の中である。

登れども、進めども、果しない深い深い谷がつゞいた。久吉は親方がなんのためにこんな深山に來たのかと奇怪でならなかつたが、黙つてついてゆくと、段々登つて午後二時頃に小さな山の峰に達した。それから方向が一變して、今度は大きな山の中腹傳ひに約三時間も歩行をつゞけたと思ふころ、とある所へこの地形目標は判然して居るがN氏の希望により秘密にして置くへ到着した。

太陽は全く西山に傾き、薄紫色の雲が山となく谷となく一面に立て込んで來た。

こゝでテントを張つて露營の二日目を迎へた。こすゑを備つて吹き寄せる風の音をきゝながら



寝についた。

疲れて居るので直ぐに眠りについた久吉は、夜更けの寒さにフト目を覺した。氣がつくと、先刻、一緒に寝た親方の姿が見えないので、急に氣がよりになつて、テントの隙間からソツト外を覗いて見た。

不思議！ 親方は一生懸命に何物かを掘つて居る。そのうちに三尺ばかりの平なものを持ちあげたと思ふと、彼の姿は地中へ吸ひ込まれてしまつた。

彼はいよ／＼不思議に思つて注視した。暫くすると親方の姿が地上に這ひあがつて來た。そして最初に見えたやうに、三尺ばかりの平なものを以前と同じやうに穴に置いて、こそこそとテントの方に歸つて來た。久吉はあわてゝ寝たふりをした。

親方は彼が眠つて居るのに安心したのか、ごろりと横になつた。やがて、いびきの聲が聞えて來た。

さあ久吉は眠れなかつた。親方の行動が奇怪でたまらなかつた。で、親方の寢息をうかがつて

こつそりと起き上つてテントを出た。

親方が掘つたところに石のふたがあつた。それを持ちあげると穴である。マッチで穴の中を照らして見ると七つの瓶が並んで居る。勇氣を出して穴の中に這入つた。

瓶のまはりには澤山の甲や鐵具足が半腐れになつて放つてあつた。

七つの瓶には朱色で鮮やかに一、二、三と番號がつけてあつた、ふたを取ると、中には金色さんと光る小判がぎつしりと詰めてあつた。吃驚して聲を出すところであつたが、親方のことが氣がかりなので、そのまま穴を出てこつそりと寢床に這入つた。そして、眠つたふりをして居ると親方は急に起き上つて、

「おい起きろ！」

と命令した。彼はぎよつとした。親方は秘密を自分に知られたことをさとつたのだ。深夜の山奥で荒料理に取かゝるのかも知れないと思ふと、急に身體がふるへて來たが、

「これから下山するんだ。早く支度をして呉れ。」



との命令に、久吉はほつと安心した。

だが支度が出来て下山の途についた時、途中で親方は、

「おい、お前は俺が寝て居るすきに小判を持ち出したらう。」

と片手に短刀を擬しながら云ひ詰つた。

「小判など……」

久吉はたゞわななくとふるへる許りで言葉も出なかつた。

「嘘を云へー つまらんことを云ふと承知しないぞ。」

「全く小判など、持つちやあゐません。」

「では裸體になるんだ。」

久吉は眞裸體になつた。親方はこまかいところまで注意に注意をして點檢したが、久吉は小判などは持つて居なかつた、

「よし、許してやる。お前が一枚でも盗み出して居りや今頃は命がなかつたんだ。」

親方は短刀をさやに納めた。

「素晴らしい小判を發見したんだ。數千萬圓はあるんだ。俺は順次に掘り出して金にかへる積りだ。今度登る時にはお前も連れてゆく。金も分けてやる、そのかはり、このことは親兄弟にでも話ちやあだめだぜ。口を割つたが最後、お前の命はないんだぜ。」

親方は念をおした。そして、數十圓の金を呉れた。それから更に下山をつゞけて翌日の夕方、富山市に歸つて再會を約して別れた。

久吉は家に歸ると親方が再び訪ねて来るのを待つた。ところが、親方は十日後、病氣で新潟で死んだことが分つた。

久吉はあの寶窟が自分一人のものになるのだと思ふと飛立つ思ひで、直ぐに旅費をつくつて富山に乗り込んだ。そして、親方と共に登つた山道の、記憶をたどりつゝ進んだ。

が、困つたことは、眞暗い夜の道を連れてゆかれたので、どこをどう歩いたのか分らなくなつたことである。



する分、歩きまはつたが遂に露營した地點すら發見し得なかつた。が、確かに見た小判の寶窟を探しあてれば數千萬圓の財産家になれるのだと思ふと胸が躍つた。

翌年、雪の消えるのを待つて、山に入つて探しまはつたが矢張り發見出来なかつた。

探檢は五年に及んだ。多少あつた財産も、そのためすつかりなくしてしまつた。

遂には奉公せねばならぬ状態にまで、立至つたが、しかし、夏になると血眼になつて山に遣入つては、寶窟を探し歩くのであつた。

X

X

X

N農學士が、黒部峡谷に數千萬圓の黄金が埋められて居ることを知つた動機は、下男の久吉が酒に酔ふて打明けた以上の不思議な話からであつた。

久吉は嘘を云ふ男でもないし、現に本人が山に探檢に行くため財産をなくし、妻子からまで狂人扱ひにされて居るのも事實と信ずることが出来た。

そこで、N農學士は久吉に相談して、共に探檢することを約し、彼の言葉によつて、登山した

順序や道筋などを圖に收めた。富山方面に出張して歴史を調査したり口碑を究め、地勢地名までも探りいよく探檢に着手したのは大正二年の夏からであつた。

その夏、黒部峡谷を探した結果、平家の落武者が住んで居るといふ有峰の里に到着した。

その部落近くに蛇塚といふのがある。部落の人は小石を塚に積み重ねて居るが、塚の中に金色の生きた蛇が居ると傳へられて居る。

金色の蛇——小判——かうした考へを結びつけてN氏の神經はびりつと動いた。そこで部落を訪ねて種々調査してみると、この部落は平家の落武者で上杉謙信に黄金百兩を貸したことがあるとか、酒盛山附近に長者屋敷があるとか語つた。

黄金の埋れたところは蛇塚の附近か、長者屋敷の附近ではないか、と氏は思つた。かくて翌日からこの附近を根據地として朝早くから人夫を督勵して探しまはつた。

が、結局第一次の探檢はむくいられなかつた。

その翌年も、また翌年も引續き今日まで黄金探檢の仕事のために限りない努力を拂つて居る。



一時は業を賣して打切らうかと思つたが、確かに黄金が秘められて居ると信じて新らしい元氣で探検をつゞけて居る。

ひとりN氏はばかりでなく、毎年夏になると多くの探検家が血眼になつて山から山へとあさりまはつて居り、N氏に物質の援助を申込み黄金発見の上の分配までも講じて居る人さへもある。

さて、果して數千萬圓の黄金の瓶が秘められて居るか。そして何人が首尾よくこれを探し出し得る幸運を負ふか——大きな謎である。

### 黒部川の主（黒部峡谷）

山山の萬年雪がとけて流れるアルプスの峡谷には随分川が多いが、なんといつても黒部川程自然の趣をそなへて男性的な愉快な川はない。

夏は急流が到る處に渦巻いてゐて、日本での急流といはれてゐる木曾、天龍などの比ではない。秋は兩岸のもみちが平地では見る事の出来ぬ美しさで燃えてゐる。

この黒部川の滑川を下つて五百石といふ所を通つて菱本温泉に出た處に菱本橋といふのがかゝつてゐる。そして、その橋のたもとに龍宮へ通じてゐるといふ、奥底深い、いつも青黒く水をたたへてゐるやうな洞穴があつて、そこに黒部川の主が住んで居ると里人は信じて居る。

昔、村の娘がこの主の所へお嫁に行くことになつたが、こし入れの時になると、川には、一面に狭霧が立ちこめて穴をふさぎ、たれもその娘のは入つたのを見ることが出来なかつた。

月日は夢のやうに流れた。娘は妊娠をしてお産する爲に家に歸つて來た。そして、娘はたれも見ないで呉れといつて堅く戸を閉ちて室に入つたが、さすがに母親は心配をした、男か女か、可愛い孫の顔みたさにそつと、のぞいてみると、たらいの中には怖ろしい龍の子が生れてゐたのであつた。

「あッ」と、思はず叫んだ。

娘はこの聲を聞いて姿をかきけしてしまつた。そして、元の穴に歸つた。それつきり二度と姿を現はさなかつたが、両親が死ぬと、親孝行であつた娘は命日の墓参りだけはかゝした事がなか



つた。そして、寺に来ると、本堂の臺がピツシヨリとぬれて居た。

### 祖父谷、祖母谷（黒部峡谷）

黒部の祖母谷に遊んだ人達は、誰でもあの温泉に浸りながら、直ぐ小屋の背後の河原から絶えず白い煙がむら／＼と立ち騰つて、或は亡者の漂ふが如く、或は悪魔の狂ふが如く、又は、佛の御來迎の様に見えたりして谷から谷に渦を巻いてゐるのを見るであらう。

小屋の直ぐ後では、この谷が二つに岐れて、右は祖父谷に左は祖母谷である。この祖母谷には至る處に熱泉が湧いて、白い湯氣ばかりがさかんに噴いてゐるのや、熱湯のくらく／＼煮えくり返へつてゐるものもある。中にはいつもとき汁のやうに白く濁つてゐるものもある。

この祖父谷、祖母谷には面白い物語がある。

島尻の伊東刑部の先祖に龍左衛門といふ人があつた。この人はなか／＼の器量人で、七村にもこの人の上に立つ者は無かつた程であつた。若い時から山廻役をつとめ、金澤から代官衆も見え

てゐたが、何處へ出ても人人に尊敬されて居た。

この龍左衛門には一ついやな癖があつた。それは女が好きでな事であつた。随分女漁りをやつたものと見えた。女房のお新といふのは、きりようよしでは無かつたが何でも近在のえらい金持の一人娘で、子供の時から許嫁であつたらしい。

お新は人一倍嫉妬深いものであつたさうな。龍左衛門の持つて生れたその癖は、年老いてもなか／＼治らなかつたので、お新の嫉妬は年と共にますますつのるばかりだつた。しかし、龍左衛門も今はすつかり年老いて、白髪となつてしまつては、もう昔の振舞のあらうはずがなかつた。それでも妻女の嫉妬のほむらは益々胸を焼き切るばかりで、はては年老いた夫をも、焼き殺さねば措かないばかりであつた。

そして行住坐臥、暫くの間とても傍を離れず何彼につけて、ひがみそねんでは夫を困らせ續けてゐた。

龍左衛門も今はどうとも手のつけやうがなく、ほと／＼ゐたゝまらなくなつた。これでは身の



置き處もない、一層夜の間に黒部の奥山路を辿つて、遠く信州に逃げ延びんものと決心して、機  
會を待つてゐた。

或晩のことであつた。

宵のうちからいやな風が吹きつづつて、東の空が赤くかどやいてゐたが、日の暮るゝにつれて  
大荒れとなつた。さては屋根をも打貫かんばかりの大雨に、家をも吹き飛ばさんばかりの大風さ  
へ加はつて、立木の折れる音やら、隣りの屋根の吹き飛ばされる音やらで、平和な山村は恐怖の中  
にひき込まれた。

龍左衛門は窓を押して見た。折しも紫電の閃きと共に、吹き込んだ一陣の魔風に、枕頭に行燈は  
消され、大廣間の御神燈まで、一たまりもなく消えて、家の内外は眞つ暗闇。

決心のほぞを固めた龍左衛門は、今は躊躇もあらばこそ、豫て用意の身の廻りの品々を取まと  
めた時、お新が眼を覺した。

「お新殿、今夜は世にも稀なこの大荒れだ、あの立木の折れる音は、みんな御領の山林の木だ、

お山廻りはこの龍左衛門の役目。夜明けを待つて領内の様子を事細かに御代官に申上げねばなら  
ぬ、夜の間に一巡りして来る程に、暫しの間留守居を頼むだぞ。」といひも終らず、闇について駆  
出した。

お新は行燈を點したり、御神燈にも灯を上げたりして、室に歸ると外はもう風も和いだらしい  
窓をのぞいて見ると、枝を動かすそよ風もなく、空は一面の星であつた。

左右を見ると龍左衛門の身廻りの品として、まさかの外は取り出した事のない家譲りの寶刀か  
ら、奥山廻りの外身につけた事のない麻の草鞋までが取り出されてゐる事に気がついた。

「さてはたぶらかされたか、憎つくき夫の振舞い。あの一時の荒れをいゝ事にして、妾を棄て、  
逃げ去るとは……、女なりとておのれをめぐり逃がさうや……、谷に墜ち餓えて死ねんまでも、  
せめては鬼となつてなりとも、跡を追はでおくものか……。」

と無念の齒を噛みしめつゝ、仕度も身拵へもあらばこそ、そのまゝ草葉の跡、岩間の跡を辿り  
つゝ、妬みと憎しみに悶へつゝ、一目散と跡を追かけた。



龍左衛門は踏を涉り崖を傳ひ、饑渴谷を攀ちて、草を分け樹を靡けて傍目もふらずに、小黒部谷から猿飛の一本橋を越えて、對ひ岸に移つて漸く安堵の思ひに一息を入れた、が心引かるゝまに後ろを振り返ると、遙かなたにほの青き一塊りの焰が、異様の唸りを立て、此方を差して駆け来る氣配、さては妻女のお新が曠蕪の炎に燃えつゝ、夜叉のやうに後追ふ様の顔ばせまでも、まさしくと見らるゝに、身も世もあらず、今は一刻の猶豫もならずと、わき目もふらず更に深谷を分け入つて、とある廣い河原に出た、と思ふと谷は此處で右と左との二又に岐れた。

龍左衛門は、はたと思ひ入り、かくも峻しい山川を涉つて越え來たのに、如何に女の念力といへ、かうまで正しく跡を離れ得らるべきではない。確かに岩間や草葉に我足あとを残したからだ、我一生の拙さであつた。此處にて二谷に岐れしこそは、もつめの幸なれ。いでや、これからは高木の梢を渡つても、跡を遺さぬものと思ひ定めた。それにしても右にせんか左にせんかと、暫しためらうたが、意を決して右の谷に入ることとした。

間もなく、この二又に辿りついた妻女のお新は、此處でふつつり足跡が絶えてゐるので、

「さてはいづれに逃げ失せたか？ 引返したものとすれば逢はぬ筈がない。さりとして追ふには足跡がない。無念や……。残念や……」

と暫しがほどは、まじろぎもしなかつたが、やがて左を差してなほも分け入つた。

張り詰めた今までの一念も、俄に弛んだのか。よろ／＼と岩間に舞れ込んで、また起たうとしなかつた。

龍左衛門は後ろを顧ると、お新の駈いて來るけはひもないので、初めて氣が緩んだその瞬間踏みはづして、谷深く落ち込んでしまつた。かうして二人の息の根の絶えたのは全く同じ時刻であつた。

お新の斃れた谷では、それから至る處に熱泉が湧いて、白い煙が今も谷中に渦巻いてゐる。そしてお新の斃れた岩間から迸る熱湯はいつも白く濁つてゐる。それでも盆の十六日の朝前だけは清く澄んで流れるといはれてゐる。それからは誰がいふとはなく、右の谷を祖父谷、左の谷を祖母谷といふやうになつた。



## 十六人谷（黒部峡谷）

黒部の大峡谷には、まだ、人跡未踏のところが多い。

昔、峡谷の黒蘆川の谷に二本の大柳が並んで生へて居た、附近の人々は夫婦柳と呼んで居た。

秋近くのある日、宇奈月近くの音澤村の柳が十六人行つて、鋸で一本の柳を伐つた。すると十六人が急に気分が悪くなつたので、近くの山小屋に急いで引返した。

その夜更けである。外に怪しい音がするので小屋番が目をさまして見ると、いつの間にか、夜目にも美しい女が、にたりにたりと凄惨な笑を浮かべながら小屋の中に入つて来た。そして寝てゐる十六人の柳の上を一つ一つ跨いでゆく。

小屋番は怖ろしさに生きた心地もなく、ガタガタとふるへてゐたが女は彼には目もくれず袖たちを跨いでしまふと、そのまま暗の中に姿を消してしまつた。

番人がぼつととして振りかへつた時に思はず悲鳴をあげた、意外、十六人の柳は口から血を吐い

て枕を並べて死んで居た。

伐られた柳の精の祟りである。それから、この谷を十六人谷と呼ぶやうになつた。その柳の切株は今も残つて居る。

## 平家の村（黒部峡谷）

黒部峡谷に日電の發電所が出来て自然美を破壊してゆく。自然美と文化の調和は至難である。

それにつけて思ひ出されるのは薬師岳の麓三千尺の高原にある平家村の有峰である。

文治の昔から七百年、浮世をよそに暮して来た、夢物語的の村であつた。

人が行くと非常に珍らしがつて「よう来やつた、来やつた。」と大喜びで迎へた、いつも程ばかりを食べてゐるので、柳などが残飯でも與へると「ようしやつた、ようしやつた」と喜んで家内中分けて喰べた。

戸長夫婦が、絶対権をもつて一室を占め、家族は親でも子でも皆隣りの板張りに爐をかこんで



鱈魚寝をする。

うら若い娘でもつくね髪で男のやうにたつつけ袴姿であるが、さすがに言葉は「ようためらつて行きた」などと昔のみやびた面影を残してゐた。

深山の奥のこの哀れにも懐かしい七百年の歴史をもつた有峰にも、發電所が出来たため十二戸は家も山も賣つた。数十萬圓の大金が落ちたので大喜びで村をすて、地方に出て百姓になつたり富山市で士族の商法をはじめたりしてゐる。中には嬉しさのあまりに自動車を飛ばして崖から落ちて惨死したといふ悲惨な滑稽もあつた。

七百年の歴史をもつた平家村も今はない。大自然が人工に損はれてゆくのも惜しい、その大自然とびつたり調和した人人が亡びゆくことも悲しい。

### 黒薙川傳説(一) (黒部峡谷)

黒部の神祕郷、黒薙川の上流に、高山の袖が、仕事に出かけた。

ところが思つたよりは險しくて道が抄取らない。尙ほ幾日か歩まなければ人里へは出られないのに食糧は無くなつて仕舞つた。

其所で斯うした時の用意に、魚釣道具を持って居たので互ひに別れて彼方の流れ、此方の淵に糸を垂れ岩魚など釣上げてそれを食つて飢を凌ぐ事にした。

ところが、ある淵での出来事だ、二人は背中合せになつて釣て居たが話の都合上「なあ左様ぢや無いか」と振返つて一人が云ふと「ほんとに左様ぢや」と一人が受けて是も振返つて見た時、どうしたのか二人共キヤツと叫んで危うく淵に落ち込まうとした。

二人は共に何を見て驚いたのだらう、——それは二人共、互ひに其の顔を見て仰天したのであつた。

それも其咎、二人共自分少しも氣がつかかなかつたが、妖怪とも變化とも謂はうやうの無い恐しい醜い顔に變じて居たからである。

「わツ」と釣竿も何も彼も投げ出して、一人が逃げると又の一人も逃げ出した。



今は山も谷も無い、滅多無性に馳けて馳けて元の道を引返したが、精魂盡きてはたと木の根に倒れた時、後からの一人も走りついて共に其所へ倒れて仕舞つた。

後からの男は可なり氣強であつた。其所で恐ろしく醜くなつた顔ながら、今一度見直してと其の顔を見ると、谷に入る日のそれとは少しも異らぬ尋常なものであつた。

是は不思議と抱き起し介抱すると氣がついた、氣が付た男も友達が親切にしてくれる顔を恐々ながら、そつと見ると是も何の變りは無ゐ元の男の顔であつた。

二人は初めて、茲で互ひの顔の恐ろしく變つて見えた事を、不思議に思ひ合ひ、怖ろしくなつて逃げ歸つた。途中で土地の人に逢ふと、

「それは山神さまの祟りぢや、人間のゆくべきところで無い、谷へ乗込んだあまつさへ魚を釣て食ふたゆへ神罰を蒙つたのである。夢々深山へはゆくものでない。」と、戒めた。

### 黒薙川傳説(二) (黒部峡谷)

日本アルプスの秘海、黒部の峡谷には宇奈月、黒薙、二見、釣鐘、鐘釣、祖母谷などの温泉がある。

清い温泉にひたり、河鹿の聲をききつゝ、幾千年來、文明の嵐とは没交渉な神祕境に包藏されるであらう。昔ながらの傳奇をきくのも嬉しい。

黒部の急流を前にして、山又山のアルプスの連山を背にした峡谷の岩間に、大地の底から湧き出る温泉を圍んで出來た黒薙に、いつの頃か、湯治に來てゐた若い女があつた。

月の蒼い夜、葎簀の日覆をした湯壺に、そのふくよかな肉體をひたし、漆の様な黒髪を梳く姿は餘りに凄艶であつた。

若者達は彼女に云ひ寄つた。が、女は、その美しい面を牡丹の花びらの様に染めながら顔を横に振るばかりであつた。



彼女には戀をゆるす男があつた。男は、この山奥では見られぬ美しい凛々しい若衆であつた。夜ごとに忍んで來た。

戀は楽しかつた。汲んでもつきぬ温泉のやうな戀の火が二人の胸に燃へた。しかし、喜びのあとで女は一つのさびしさと不満に襲はれた。戀するものゝ誰もが願ふ最後のものを男は承知しないからである。

「ほんとにわたしを可愛ゆがつて下さるのでしたら。」

娘は訴へた。が、男は切なる女の願ひにも承知しなかつた。

「添ふなどと考へないで此儘いつまでも戀し合ひませう。」

「何故です。何故添はれぬのです。」

「そなたと添ふたら、その時が私たちの戀の終りになる。」

「わたしにはそのわけが分りません。」

「私には分る、そなたに捨てられることが分る。」

「そんなこと、わたしが死んでもありません。捨てるなど。」

「ほんとに捨てないか。」

「誓ひます。」

男の眼は喜びに輝いた。そして、ひしと女を抱いた、女は喜びに涙さへ浮べつゝ、男に縋りついた。

夜が明けた。喜びの夜が明けた。女がふと氣づくとも男の姿は床の中になかつた。と、いひ知れぬ不氣味な匂ひが男の去つたあとから香つて來る。女は驚いて夜具を弾ね除けるとそこから縁側へ、長々と細引のやうな蜘蛛の絲がついて居るのを見た。驚きと怖れに女はふるへた。

と、おそろしい嵐が襲來した。雨は大地を叩きつけた、風は狂ひまわつた、その嵐の中を女が温泉を逃げ去らうとした時、一匹の山蜘蛛が足をのぼして女を抱いた。女はもう血の死體であつた、その血の死體を抱いて大きな蜘蛛は立山の方へ逃げのびてゆくのを村人たちは見たといふ。



鐘釣温泉（黒部峡谷）

黒部峡谷の鐘釣温泉での出来ごと。

昔、浴客が黒部の谷から吹きあがる濃霧をついて山峽の道を歩んで居た。ふと振返つたところ向ふの谷に五、六丈の大入道が美しい七彩の後光を輝かしてポツカリと現はれた。

「有難い、御來迎だ」

彼は禮拜した、そして、ふと顔をあげると大入道は十六も現はれてすらりとならんでにやにやと笑つた。

悲鳴をあげて浴客は卒倒した。

愛本橋（黒部峡谷）

黒部峡谷の愛本橋にたゝずんで下流をみると、左右に扇子をひらいたやうに見ゆる三角洲があ

る。今は、田畑となりその駒の蹄のあとかたもないが、昔は黒部駒の産地であつた。

天正九年十月二十九日。富山城主佐々内蔵介は黒部駒とて大刀ノ駒外十八頭を安土城に居た信長に獻じたこともある。

昔——愛本橋がまだ假橋であつた頃——橋のほとりに、老夫婦と、美しい娘が、さびしい、けれど幸福な生活をつゞけて居た。

娘の美しさは若い男たちの噂のまのであつた。そして、ひそかに思ひを寄せる者も多かつた。

ある日のこと——。

愛本橋の上に手拭と赤い酒樽の置いてあるのを山から歸りのお爺さんがみつけた。誰がこんな處にこんな物を置いて行つたのであらうか。と不審に思ひながらも、その儘にして家に歸つてしまつた。

其の翌日も亦次の日もお爺さんは手拭と酒樽が同じ處に置かれてあるのが目に入るのだつた。お爺さんは酒が大の好物であつた、もう五日も何じ處にあるのに、雨が降つても不思議な事には



手拭は少しも濡れて居なかつた。お爺さんは、もしこゝへこの手拭と酒樽を置き忘れて居つた人が判つたならば、又酒を入れて返してやればいゝと思つて、或る夕方山からの歸りにその酒樽と手拭を持つて歸つた。

すると其夜である。お爺さんが娘のお酌で一杯やつて居る時、一人の若い男が訪れて來た。

「私は今嫁をさがして居る者です、それで橋の上に酒樽と手拭を置いてそれを持つて行つた人の娘を貰はうと思つてゐたのです。幸お爺さんが持つて行つて下されたので私はお爺さんの娘さんを貰ひに來ました」とお爺さんに話した。

「娘さへよかつたなら」と云ふので、恥しさうにうなだれて居る娘に聞くと、うなづいて承知した。そして次の夜結婚の式を挙げた。けれども未だお爺さんもお婆あさんもその若者の名前も何處の者だと云ふ事も知らなかつた。幾度尋ねて見ても今に知れるからと云つてどうしても明さなかつた、そして娘——妻を連れて山の方へ移り住んだ。

それから二年は夢の間に過ぎ去つて、娘は妊娠した。やがて今日にも分娩すると云ふ時、兩親

の家に歸つて來て、自分の産室として高殿を建て貰つた。

「分娩してからあけてもいゝと云ふまでは、私の室へ來て下さいませ、又覗いても下さいませ、な、もし覗き見でもしたならば悲しい目に會はなければならぬ。」

と兩親に告げてから、新しく建て貰つた、高殿の中へ入つてしまつた。

お婆さんは我子の初産を大變心配して居た。それに老人に取つては初孫の事でもあり、心配で心配でならなかつた。其の翌日、たまらなくなつたお婆さんはコツソリ娘の室の前に來て中を覗いて見た。そして驚きのあまり、そこへ腰を抜かしてしまつた、それもその筈、娘はいつの間やら蛇身となつて、一匹の小さい蛇を抱へて寝て居たのだつた。

それからしばらく過ぎてから、娘は兩親の前に子供を抱きながら、悲しさうにうなだれて「妾の姿を見られたので、妾もあなた方を兩親とする事が出来なくなりました。妾をこれまで大きくして戴いたお禮として、老後安樂に暮せる様ないゝことをお教へします」とササマキの製法を傳へて山の方へ妾をかくしてしまつた。



それからお爺さん、お婆さんはササマキを造つて世を終つた、これを真似して附近一帯には、ササマキを造つて暮しを立てるものが多くなつた。

### 船 橋 (黒部峡谷)

黒部峡谷を貫流して日本海に注ぐ黒部川は、日本アルプスの連峯の萬年雪がとけて流れるものである。

昔——北陸道を通行する旅人にとつては、親不知の險所と共にこの川を渡することは困難とされて居た。

大雨の時など川原一杯に漲る水は、一夜のうちに湖水が出来たかと訝かられるほどであつた。だから、親鸞上人でさへ、洪水のために沓掛といふ所の淨永寺に永く逗留した。上人の衣掛の石が残つて居る。

越後の英雄上杉謙信が北陸へ進出の際も、この川には弱らせられて居る。

寛文二年に愛本橋が出来た。しかし、廻り道なので舊幕時代の大名行列は主に上街道を通行し、川に船を八十艘位つないで船橋を設けた。

明治十一年秋九月 明治天皇の御巡幸あらせられた時も、橋をしつらひ申しあげようもなく船橋を御渡りなされたとのことである。

### 佛石の茶屋 (黒部峡谷)

黒部峡谷宇奈月温泉は、昔五千坊の伽藍を擁護したといふ、佛教發祥地と言はれて居る。

温泉近くの佛石の茶屋附近に、怪奇な話が傳へられて居る。

寛永の頃、どこから来たのか一人の石工が山に登つて、この岩石を發見した。名人はだの石工は岩石に彫刻をしないと云つた。それから山にこもつて一挺のみを握つてこつくと岩をきざみはじめた。そののみの音が靜寂そのもの、山峽に響きわたつた。

彼は龍、大蛇などといふ怪奇なもの、姿を岩に彫りつけて行つた。さながら生きて居るやうに



これらの動物が岩石に姿をうへつけられた。が、彼がもつとも力を注いだのは大蛇とも天狗とも龍ともつかない、うの目、たかの目といふ怪奇な動物の彫りものであつた。

彼は熱狂したやうに仕事をつゞけた、山は夜になつても、のみの音は絶えなかつた、彼は岩に彫刻をなすために生れて来た人間のやうに、岩から一刻もはなれずに仕事をつゞけた。日となく夜となく月日は重なつて秋近くになつた。

月光が青くさえてる夜であつた。彼の仕事は完成に近づいた、岩には偉大なる彼の藝術がきざみ込まれた。彼は狂喜のあとのはげしい疲労のために深い眠りにおちいらうとした、その瞬間である、突如、山は震動した、大音響と共に彼が生命を投げ込んで彫刻した大岩石は崩れた、その下敷となつて不思議な藝術家は死を遂げた。岩がくづれたところは風穴となつた、彼の藝術品は千々に碎けて地中に埋没した。

そのあとに不思議、阿彌陀如来を彫刻したと思ふばかりのあとが岩に残つた。今も、たづねて行く人々に驚異の眼をみはらしめる。

猫 又 山 (黒部峡谷)

新鐘釣温泉から白馬嶽へ登攀する道は嶮絶悪絶である。そこに猫又山といふ山がある。

元和の頃――

越中方面に不思議なことが起つた、南の空から北へはるかに眞赤な雲が流れ、その色は人の心を壓迫するやうな氣味の悪い、生首からしたゝる血のやうな赤さで、仰ぐ心を恐怖に戦かせた。

「たゞ事でない不吉の前兆だ。」

人々はこんなことを囁きあつて、不安を感じ合ふのであつた。

果して、黒部峡谷に猫又といふ怪獣が出現した。

仰々、猫又といふ怪獣は富士山に棲み、木花咲耶姫の鎮座まします富士権現に任へる老猫の故をもつて、御使として重用されて居た。

ところが、源頼朝が富士の巻狩をした際に、猫又も數多の獸と共に狩出され、身をかくす場所



を失つて軍兵を喰ひ殺して逃げ歸つたが、権現様は立腹した。

「血に汚れた汝のやうなやつはこゝに置くことはならぬ。」

猫又は永年棲みなれた富士を追放されて黒部峡谷に流轉して來た。

猫又はさかんに人を殺した。殺された人の死體はいづれも惨酷をきわめた。

怪獸は人を殺すと、かならず死體をくわへて千里の竹藪を越す猛虎の勢で小石の礫を蹴散し

て嶮岨な山を平野を、走る如く忽ち視界から消えてしまつた。

怪獸！ 怪獸！

山峽の村に恐怖時代が訪れた。

三人の惨死をまのあたり見て、その後は作場へ出るものがなくなつた。夕方から堅く雨戸を閉し息の根とめて縮み上がったのである。用事があつて訪れても戸を開けてはくれず又用があつても外出しやうとはしなかつた。

たゞさへ森閑な山村は死の如き恐怖にしづんだ。

村人はいたづらに戦慄の幾日かを送つたのであつた。

或の日村中の人が相談會を開いた、結果

「かう無爲に暮してゐたなら食料が盡き餓死するより外はない。又いかに強猛な性であらうとあの獸を退治しなければ人種を喰盡くされてしまふかも知れぬ、此上はお上に御願ひして退治して貰はうぢやないか」と満場異議なく可決した。

庄屋の護衛に屈強の若者五人を選び、途中氣掛りだからとて各々武器を携へ決死の注進をなすことになつた。

「此たび九尺ばかりの怪獸が現はれ、村人を喰殺めます。私共微力の者には如何ともなし難いから、何卒お上の御威光を以て退治して下さる様切に願ひ申上げます」と、ひたすら懇願し奉つた。

「それは容易ならぬ事ぢや。早速狩取つてやらう」と代官の返事。

庄屋の一行は途中のこわさも忘れ大喜びで村へ馳せ歸つた。



山狩は行はれた、勢子、狩人等あまた出動した、怪獣を発見すると一同はたちまち、喊聲をあげて、四方から追ひたて、行つた。やがて――

ど、どつと挟み打ちに、十間程ひた押に押迫つた時。

猫又はむつくと起き上がった。兩眼は憤怒に燃え、爪を研澄し、咽喉唸らせて寄らば一と噛みといはんばかりの形相。

千餘の勢子はその場に立竦んでしまった。双向ふ臆つ玉はくちけ逃げ出す餘裕も失はれた。

山靈を驚かしたときの聲、忽ち身の毛がよだつやうな静寂に變つた。牙を渡る谷川の音。戦く心に恐怖の波を打つ。

だが、流石の怪獣も威勢に怖れていづれへか逃げ去つてしまった。怪獣が居た山を人々は猫又山と呼んで怖れた。

附近に猫の踊場といふのがある。

月光が美しく冴ゆる夜――どこから集まつて來るのか澤山の小猫がこゝに集まる、やがて、猫

どもは立あがつて奇怪な踊りを夜が明ける頃まで踊る、山が紫色に明ける頃になると猫は姿を消してしまふとも云はれて居る。

ここから更に數丁も下に不歸嶽があつて恐ろしい話を傳へて居る。昔からこの山の頂上を極めやうとて登つた獵人や探險家でまだ一人として無事に歸つた人がない。山に魔物が棲んで居て登山者を八ツ裂にするのだと里人は怖れて居るが、科學者は毒ガスを吐く山であるため登山者は毒氣にうたれて死ぬのだとも説明して居る。

### 岩魚と蛇（黒部峡谷）

神秘的な山の話一つ――北アルプス連山を縫うて流れる谷川には、いま至るところに澤山の岩魚が棲息してゐる。殊に黒部川の上流には素手で捕獲し得るほどに二尺餘もある大きいのがゐる。

このあたりでよく登山者を驚かすのは岩魚と蛇とつばめとの闘争だ――蛇は多くはしま蛇だ。







ぎらした。

二人の戀は魔の淵に咲いた花を取らうとあせるやうなものであつた。

ある夜娘がいつもの如く花咲く高原で男と戀を語つて居る時、娘の素振を不思議に思つた父親が發見して娘を散々に叱りつけた。娘は遂に男と別れる事を餘儀なくされた。

娘は悲しかつた。父母の寢沈まる頃を見て翌晩も高原へ走つた。

「當分會はないでませう、わたし、死ぬほど悲しいのですけど……」

娘は男に訴へた、眞珠のやうな涙を彼のやわらかな手の上に落しながら……。

男は女が心變りしたものと誤解した、彼は暗く沈んだやうになつて女の言葉を聞いてゐたが、暫く經つて云つた。

「會はないといふのは私を欺く言葉だ。裏切る女には男の呪がある。」

男の姿はたちまち見るも恐ろしい悪魔と變じた、雨が降り出した、一團の黒雲が矢のやうに降つて來た。

「あッ！」

あまりの怖ろしさにそこに倒れた娘を悪魔は抱へたまゝ黒雲にのつて白馬岳の頂上に飛び去つていつた。

小姓姿をして娘と戀を語つた者こそ實は大魔王といふ魔神であつた、そして、彼女は花のやうに美しく滑らかな身を八つさきにされた。

眞赤な娘の血は高原に咲く花をも赤く染めた。そして今まで純白であつた傘櫻を紅に彩つた。

それから年々純白な花は紫紅色に變じて咲いた、娘の血を今日まで残してゐる、その花こそ大櫻草である。

山を愛し山にあこがれる人々は山に咲く花を愛し、花に秘められたローマンスに涙を注がすにはおられない。

山之坊 (白馬岳)



白馬岳に越後口から登る人は、蓮華温泉に一泊する。その近くに山毛樺の森が茂る山之坊といふ部落があり、登山者はこゝで食料や必要品を準備する。

二百年ばかり昔、このあたりに「山之坊の萬」といふ、怖ろしい山男が住んで居た。

「そんなに泣くと山男に喰はしてしまひますよ。」

母親がかう云ふと、今まで泣いて居た子供達も泣きやんだ。

「山男が蛇を裂いて喰べて居た。かう目を判いて——」

村人が子供達に云ふと、もう、顔さへあげ得ないで怖れた。

その山之坊の近くの樺の中に神木があつた。それを伐らうものなら天地が鳴動して大雨が降つて人も家も田畠も悉く流れると大昔から傳へられて居た。

ある時、この大樺を伐出して金にしようと思つて二人の樵夫が山に這入つて來た。二人がかりの大きな鋸を、樹肌に喰入れて曳いて居ると、ゲラ／＼と笑ふ聲がする。

木の茂の中には怖ろしい獸のやうな大男が突立つて凄い目で樵夫をにらんで居る。

「あッ！」

樵夫らは生命から逃げて歸つた。

「鬼が棲んで居る。」

「怖ろしい山男が居る。」

こんな噂が更に樵夫どもの口から擴がつて人々を恐怖させるのであつた。

村には元氣のいゝ獵師が居た。ひどく度胸のいゝ男であつた。

「山男がなんで怖ろしいのだ。」と、笑つて鐵砲をかついで山へ行つた。

突如、バサバサといふ音がした。彼は猪だと思つて急いで銃を取つた。喰ひ合つた杉の枝がバサと動くと眞黒な怪物がさつと躍り出た。

ズドン、と火蓋を切つた。が、彈丸は怪物を外れたので、更に、第二の彈を放つた。

「生意氣なことをするな。俺は山之坊の萬だぞ、貴様の命は助けておかない」

怪物はぶる／＼と總身を怒らして素早く體を隠した。



獵師は怖ろしくなつて、一目散に山道を逃げた。しかし、急に息が苦しくなつて村近くまで來ると悶絶した。村人に發見されて家に歸つた時は、冷たい死體であつた。

獵師には十四歳になる息子があつた。少年は、父の死體に熱い涙をこぼしながら、

「お父さん、この仇はきつと討ちますぞ」と、叫んだ。

少年はある朝早く家人にも村人にも告げないで家を出た。

父が残した銃をかついで、小山の上に立つて四方を見渡すと、一時に元氣が湧いて思はず肩の銃を堅く握りしめた。

だん／＼と白馬岳の登山路をわけていつた。本草の生根からはひ出た道は次第に落葉が深くなつて、穿いてゐる草鞋はびつしより軽く水をふくんでゐる。

少年は勢ひよく彼方此方の谷から峯へと捜し歩いたが、怪物の姿は見えない。茂つた木の間から漏れる日光を見ると正午になつて居るらしいので谷間の岩に腰を下した。見ると、岩の根元に綺麗な水が湧いて居るので木の葉にうけて啜りながら携帯の辨當を擴げた。

風の音もない静寂を破つて、カン高い鳥の聲が時々響いて來る。と、バサバサといふ音をやゝ遠くの方で聞いた。少年は銃を持ち直した。

その時、喰ひ合つた杉の枝が、ぱつさりうごいたと思ふと眞黒な怪物が飛び出したのだ。

「さては怪物だ！」

ねらひは定まつた。殺氣をふくんだ少年の指は引金を引いた。

轟然一發！ 煙は四方をこめた。

たしかに手應へがあるので近づく、そこには全身毛で包まれた怖ろしい人間が血に染まつて死んで居た。

少年は父の仇を討つてその日の夕方村に歸つた。家人や村人の喜びは云ふまでもない。そして彼の勇氣と孝心を深く賞めた。

奇怪な山男といふのは白馬岳に久しく住んで獸を喰べて居たものだといふが、その正體は分らなかつた。



蓮華温泉傳説 (白馬岳)

白馬岳から雪倉岳を縦走した人は蓮華温泉に下るであらう。

いつの頃か——夜のことである。村の若者が真夜中ごろ馴れた道とて雪倉岳の麓路を急いで居た。

かすんだ月がぼんやり出て、細長い山道を青白く照らして居る、もう、村に近い頃、ふと、誰かがついてくるやうな気がした。

若者はふり返つた、けれども、そこには唯生茂つた杉の木立が道の兩側をかこむのみで何の姿も見出せなかつた。

「變だな。」

若者はつぶやきながら又歩きつゞけた、けれど、何となく恐ろしかつた。若者は大聲を上げて得意の追分を歌ひ出した。それは、恐怖から逃がれやうとする可憐な彼の努力であつた。洗練さ

れた美しい聲が靜かな山路に反響して速く消えて行く、若者は一心に歌つた、聲がとぎれると、確に何者かのかすかな足音が耳に入る、丁度宙を行くやうな軽い足音であつた。

若者は又大聲で歌ひ始めた。かうして彼は恐怖におそはれながら村に歸つた。

かうした事があつてから村の女達がこの不思議なものに連れ去られた。そして靜かな山峽の村に心地よい朝が訪れる頃、何處からともなく歸つて來た、

村の物知りは額をあつめた。その席上一人の古老は次の如く語つた。

「それは送り狼と云つて、昔からよくある事だ。何も危害を加へるものでない。この村の氏神の森の主だ、心配することはない、村人を守護して下さるのちや。これから、峠を通る時には御禮に進げる握飯を持つて行くがい、女達は氣の弱い者だから、恐ろしさについて道でも迷ふのだらう。」

村人は漸く胸を撫で下した。けれど、村人から全然恐怖をとり去る事は出来なかつた。

「馴れた一筋道だ、間違へる筈がない」かうした疑問に人々はやはりそこに奇怪の實在を信ぜし



めて夜ふけには誰も時を通らなくなつた。止むを得ぬ時は二人三人連立つて用を達した。

時によると野良歸りのうら若い女がいつとはなく狼に誘はれて一夜姿を消す様になつた。

村には一人の美しい娘がゐた。貧しい家に生れながら、玉のやうな張り切つた黒目勝の眼には

魅惑的な力がひそんで居た。美しい漆黒な髪には總ての誇りが示されて何等の屈托もないふく

かな曲線美は、成熟し切つた女性の美を表象してゐた。

嵐が襲來した。物凄しい風が、大粒の雨とともに、烈しく大地をたゞきつけて、總てを暗黒と恐

怖とに包んだ。山は荒れに荒れた。

村中を包んだ強烈な嵐も、暗黒が去つて華やかな光線が流れ初めると共に、あとかたもなく姿

を消して再び嵐の後の静けさが來た。しかし、嵐の夜に村一番の美しい娘が行衛不明になつてし

まつた。

娘が奇怪な送り狼に連れられて行つたことは山の麓の水量を増した小川のほとりに彼女の櫛

が落ちて居たことで分つた。だが、娘は二度と村には歸らなかつた。その後は、狼も出す村には

平和が來た。

「村の犠牲になつて呉れたのだ。」

「美しい可愛い娘だつたが。」

娘の櫛の落ちて居た谷川の岸には毎年夏になると、一輪の大きな花が咲く。さうしてそれは娘

の命日待つてくづれるやうに、散つて行くといふ。

姫川傳説 (白馬岳)

大昔、越後の糸魚川に太守が居た。息女に白菊姫といふすばらしい綺麗なお姫様があつた。

ある秋のこと、姫は殿様に連れられて白馬岳の麓に紅葉狩に行つた。

その時——小高い山の上からこの紅葉狩の有様を眺めて居たのは白馬岳の池に住む龍神であつ

た。龍神は美しい小さな紅葉の枝を持つて居たのである。そして姫の姿を見ると何か思ひついた

様に急に姿を消してしまつた。



その時、太守はこの有様を見て居たので龍神の姿が消えてなくなつたことを非常に心配した。それから五日許り立つて夕立のあつた後で、五六十人の美々しい行列が山の方から城に近づいて来た。やがて、門前に来ると、隣國の太守の使者だといつて面會を申込んだので、しかたなく使者に會見すると、使者の口上は姫を嫁に貰ひたいといふのであつた。

けれども太守は、姫は一人娘だから差上げることは出来ない、キツパリ断つたので使者は何もいはずに辭した。だが、不思議なことには歸る時にも来た時のやうに夕立があつた。

五日ばかり立つと使者は今度蛇の姿で山の方から来た。そして、自分達は龍神の家來であると打明けて、お姫様を貰ひたいと頼んだ。

太守は元の通りに断つた。

龍神の家來はこの酬ひは必ず來るといつて忽ち雲に乗つて歸つていつた。そして、少し立つと大粒の雨が降つて来た。それが、一日や二日でなく毎日毎日根氣よく降つた。

十日ばかり立つと大洪水となり、城は水にひたされてしまひ、城下の人には勿論のこと太守の美

しい姫も溺死してしまつた。

今も糸魚川のほとりを流るゝ日本アルプスに水源を有する姫川はその時に出来た川である。

### 蓮華温泉縁起 (白岳馬)

陽は高く輝いてゐた、白馬岳の中腹の雑木林のほとりの岩角に一人の武士が腰を下してゐた。

白樺の林から老鶯の啼く音がしきりに聞へる。

傍らの道で山の子供たちが語りあつて居る言葉を武士は聞いた。

「いゝものをひろうたぞ。」

一人の子供が小さい石のかけらを示した。

「どうれ見せろ。」

別な子が覗き込んだ。

「光るだらう。」



「うん、光るな、いゝ石だな。」

武士の眼は異様に輝いた、つかつかと子供達の傍らに歩みよつて云ふ。

「その石を見せてごらん。」

武士の異様に光る眼を見て子供たちは怖へて石を渡すと逃げ出した。

石！ 光る石！ 武士は狂喜して叫んだ。

「おうー 金だ！ 黄金だ！」

その武士は、越後春日山城主上杉謙信の家臣で、金鑛発見のため山々を探検中であつたのだ。この喜ばしい報に接した謙信は多数の人夫を送つて金鑛の發掘をさせた。

だが——人々の期待を裏切つて黄金は掘れども掘れども發見する事が出来なかつた、そしてある日、穴からは湯が湧き出した。

「大變だ！ 湯だ！」

熱湯が物すごい音響を發して噴出したのである、この温泉を誰よぶともなく黄金湯とよぶやう

になつた。

それから後の秋の朝——白衣を身にまとふた一人の老人が杖にすがつてとぼとぼと山道を辿つて來た。

そして温泉にひたつた。加賀、越中、越後の温泉を残らず廻つたがきゝめがなかつた彼の奇病もこの温泉にひたるとたちまちに全快した。

「三國一の温泉だ。」

老人が吹聴したので三國湯といふ名にかわつた、そして今は蓮華温泉と呼ばれて居る。

### 姫川由來（白馬岳）

白馬岳の中腹の平倉山にたてこもつて居たのは平倉十郎春盛といふ武將であつた。

頃は永祿四年——。

越後の上杉謙信は甲斐の武田信玄と覇を争ふべく川中島に戈を交ふるに先立つて部下の將に命



じて小谷の山中で戦はしめた。

越後と甲斐の交通路は白馬山麓の糸魚川街道である。こゝを奪ふことは兩將の希望であつた。早春であつた——白馬岳は雪に埋もれて居つた、武田方の主將山形昌景の率ひる軍は残雪をけつて春盛が守る平倉の阪盛城を攻め落し勢に乗じて平倉山へ殺倒した。

平倉十郎春盛は死守した。戦ひは連日連夜つづいた。ところが武田方に小谷五人衆が味方して多數の兵を率ひて参加したのと、平倉の峰に水のないことが春盛にとつては苦戦となつた。

水のないことを敵に悟らせぬための苦肉策として、水で馬を洗ふと見せかけるために白米を馬にそゝぎかけた。が、敵はそれを米だと見きわめた。

「敵は水に苦しむと見へた、水一滴敵に汲ますな。」

水責めを行ひ、更に、火を放つて火責めをした。春盛の軍は血戦の甲斐もなく城は落ちた。春盛は姫と家臣五人を連れて城を逃がれた。

山にも春が訪れて居た、櫻の花がはらはらと散る。

この上は腹掻きさばいて越後武士の膽を見せではやまぬ、春盛は散り来る櫻の花の中で自殺の仕度を整へた。

「わが君、死ぬのは早うございます、一度はこゝを逃れ給ふて謙信公に戦の赴きを告げさせられ

——さる後に死を決せられてもおそくはございませぬ。」

家臣らは口々に説いた。

春盛も意を決した、愛馬に鞍置き直させ、別な駒には美しい姫を乗せた。

馬跡の音——春盛と姫の二騎はたちまち迅走し、からめ手に血路を開いて中谷川の溪流に逃がれた。

川岸をそふて走つた。けれど、女の身の悲しさ姫は馬術を心得なかつたので、あやまつて川の中に落ちた。

千古消ゆることのない白馬岳の白雪が解けて流れる川水は美しく姫の身を呑んだ。

それから川の名を姫川と呼ぶ。



山うばの里（白馬岳）

謡曲で名高い山うば——山路に行きくれば旅人に向つて、

「なう／＼旅人御宿参らせう。これはあげろの山とて人里遠き所なり、わらはが庵にて一夜を過ごさせたまひ候へ」とすゝめ、旅人にしつこく頼んだ謡曲を聞きつゝ、「鬼女が有様みるや／＼と峰にかけり谷にひゞきて、今までこゝにあるよと見えしが、山また山に山めぐりして行方も知らず」なつた山うばも日本アルプスが生んだ怪女である。

白馬岳の山腹の上路村、五十戸足らずの寒村だが村をすぎて更に山に登ること約二里に、山うばの居たほら穴がある。幅二間、高さ七間、その奥は遠く信州の山々につゞくさうだ。この頃では彼の女は信州へ移つてしまつた。然し時あつて懐かしいこのほら穴に歸り赤ん坊の赤い着物を干すことがあるさうだ。又穴の周圍に焰の色をした美しい花のさき亂れる頃に緑の山を背負ひ、遠く日本海を望む絶景を誇つて、彼の女は歌つて居る。

「わが住む山家の景色、山高うして海近く、谷深うして水速し。前には川水こんこんとして月眞如の光をかゝげ、後には巖松幾々として風常住の夢を破る。」

所詮——山うばも山の詩人だつた。

丹波大江山の酒香童子とその一黨の鬼共が、漂着した外國人だつたらしいと同様、山うばも外國人らしい。

何百年か昔、十數丈の波のうち狂ふ日本海に木の葉のようにもみぬかれたヨーロッパ人の船が流れ流れて親不知近くに漂流したのであらう、そして幸ひにも助かつた何人かゞよろめきつゝもがけを登つてこゝに落ちついたのだらう、幕末の頃になつてさえ「外國人」を見て飛び上る程驚いた位だもの、何百千年か昔にこの變つた人種が「鬼」に見えたのも無理はない。その形容に「形人の如し、長さ二丈餘、黒色赤目にして黄髮、山樹中に巢を作つて」と記されて居る。

女（白馬岳）



それは白馬岳の秋も深んで木の葉もすつかり散つて、冷たい風が屋根から路を吹き渡る頃であつた。

獵師の茂作と息子の箕吉は山に獵に出かけてゆつた。

思ひがけなく暴風雪が襲來した、彼らは途中の山小屋に逃げ込み、寒い一夜を明かすことになつた。

それでも、老いたる茂作は、疲れのまゝに寢入つてしまつたが、まだ若い箕吉は、どうしても吹雪の音と、河瀬の騒がしい水音に、なかなか寢入ることが出来なかつた。それでも、いつの間にか寢入つた彼は、ふと、顔に雪の降りかゝる冷たさに、ふつと覺めた。見ると、小屋の戸が開いてゐる。ところが、驚くではないか雪光に、室内に一人の女が坐つてゐるのが、ありありとわかる。

その女は、あくまで色が白い。

そして、茂作の上に屈んで、呼吸を吹きかけてゐる。その呼吸が、また、白く光つて見える。

と、女は、今度は、箕吉の方を振り向いて、段々近より、彼の上へ、低くのしかゝつて來る。

箕吉は、恐ろしくて、聲を立てやうとしたけれども、どうしても立てることが出来なかつた。そのうちに、女の頭と、箕吉の顔とは、も少しで觸れさうにまでなつた。箕吉は、ちつと女の顔を見つめた。眼は怖いけれど、大層美しい女だと思つた。

女も亦、暫く彼を眺めてゐたが、やがて、箕吉に向つて囁いた。

「私は、ほかの方のやうに、あなたをあつかはうとは思ひません。あなたはほんたうに美しい方だから、私はあなたを、どうもしますまい。そのかはり、あなたは、今夜のことを、誰にも話してはいけませんよ。たとへ、親身のお母さんにでもお話なさると、私には直とそれが知れますから、その時には、あなたを殺してしまひますよ。このことは、きつと覺えてゐらつしやい。」

かう云ひ終つて、その女は箕吉から振り返つて、戸口の方へ逃げてしまつた。

女がゐなくなると、箕吉の身體も自由になれたので、いそぎはね起きて外を眺めたが、もう、女の姿はどこにも見えなかつた。



気がつくとも父は冷たく硬つて死んでゐた。夜が明けると暴風雪もおさまつたので箕吉は泣く泣く家に歸つた。

翌年の冬の雪の夜、美しい娘が道に行きくればとて救ひを求めた、箕吉と母は女を歡待して暖かい食物などを與へた。

女の名は小雪といつた。そして、そのまま彼の家に居ついて結婚した、十年後に子供も五人生れた。が、小雪は五人の母になつても美しさがかわらなかつた。

それは或夜のことであつた。小雪が、行燈の灯で裁縫をしてゐるとき、箕吉は、ふと昔のことを考へながら云つた。

「お前が、かうして裁縫をしてゐる顔を灯影で見ると、私が十八の時に出會つた妙な事を思ひ出す。あの時、私の出逢つた女は、今のお前のやうに眞白で美しかつた。」と云ふと、小雪は、自分の仕事から眼を離さないできいた。

「お話なさいませぬ、その女のことを。あなた、何處で、そのかたにお逢ひなさいまして。」

箕吉は、山小舎の中の、恐ろしい雪の夜の事、眞白い女が、自分の上にかぶさつて、笑ひながら囁いたこと、父の著作が、いつの間にか死んだことなどを話した。

「その時、ちよつとの間だつたが、夢うつゝに、私は、お前のやうな美しい女を見て、怖いと思つた、その女は、ほんたうに白かつたよ。あれが雪女といふものであらうか。」

かう云ふと、それまで、黙つて聞いてゐた小雪は、急に、裁縫を打棄つて立ち上り、

「それは、私、私だつたのですよ。それは雪だつたのですよ。が、あなたは、その事を、いつまでも、一言も口外なさらぬといふ約束でしたわね。もし、それを破つたなら、私は、いつでもあなたを殺してしまふといつたことを覚えておいでですか。今こそ、あなたは、それを破つたので、殺される筈なのですが、あなたを殺すことは致しません。けれども、今後、あなたが、子供を粗末にするやうなことがあつたら、私は、あなたをただでは置きませんよ。」

かういふ其聲さへ、風のやうに微かに細つて、小雪は、やがて、屋根裏へ出る白い煙と消え山の方へ失せていつた。そして、もう、二度とその姿を見ることは出来なかつた。



晩秋の山の宿（白馬岳）

白馬岳の山ふところに抱かれる蓮華温泉——

温泉とはいへど茂る杉の林にかこまれて、たゞ一軒の宿があるばかりである。湯はこんこんと  
して盡きない、山峡の大気は澄んでゐる、しかし、不便なために浴客はすくない。

明治三十年の秋——山峡の秋は深んで浴客も山を下つた。そして、宿は冬ごもりの仕度に取りか  
かつてゐた。

月光の美しい夜であつた。

宿の戸をぼとぼと叩く音がする。ろろりに燃ゆる榾火で山鳥を焼いてゐた主人は、

「どなたですか」と、聲をかけた。

「一寸あけて下さい。山道に迷つた者なんです。」

男の聲だ。

戸をあけると、青白い月光を浴びて、そこには洋服を着て、烏打帽をかぶつた、紳士が立つて  
ゐた。

「やあ、どうも有難う、すみませんが今晚泊めて下さいませんか。」

男は微笑を浮べつゝ云つた。

「泊つておいでなさい。そのかはり何ももてなしは出来ませんよ。」

「いや、泊めてさへ頂けばいいのです。」

彼は室内に遣入つて靴の紐をときはじめた。主人は不審な客と思つてたづねた。

「旦那は今頃、どうしてこんなところにいらつしたんだね。」

「いや、實は、鐵砲を打ちに来たんです。ところが、谷に鐵砲を落してね。その上、道をまちが  
へてしまつたんだよ。一時は、どうしようかと思つてゐた。幸に、この灯が見えたのでやつと  
たどりついたんです。おかげで生命びろひをしました。」

「そりやえらい目にあひましたね、旦那はどちらの方です。」



「東京の者なんだ。今日、糸魚川口から登つたんだよ。」

紳士は爐端に、にじり寄つた。

「山鳥をやいてゐるところです。よかつたら御飯をおあがりなさい。」

「そいつは御馳走だね。ちやあ、頂きませう。」

「温泉に道入りませんか。」

「いや、御飯を先に頂きませう。なにしろお腹がぺこぺこなんだから。」

主人は食事の仕度に取りかゝつた、彼はこの春に妻をうしなつて今では八つになる男の子と二人きりで、この山の温泉を安住の地としてゐるのだつた。

飯の仕度をいそいでゐる主人はふと、奥の部屋で、八つになる男の子が、はげしく泣き出す聲をきいた。

「これ、何を泣くんだ。」

子供のところへ飛んで行つた。

子供は眞青な顔をして、身體をわなわたとふるはせてゐたが、父親を見ると、飛び起きてしがみついた。

「父ちゃん怖いよ。」

更にはげしく泣くのである。

「何も怖いことはない。お前、夢でも見たんぢやあないか。」

子供は泣きながらはげしく首をふつた。

「いゝや、怖いんだよ、父ちゃん、怖いんだよ。」

「何が怖いんだ。」

「父ちゃんあの人が怖いんだよ。」

子供はさつき来た紳士を指しつゝ父親にしがみついたのである。

「あの人が。」

主人は紳士を見た。彼は、煙草をうまさうにふかしてゐた。別段、怖ろしいものはなかつた。



「馬鹿だね、あの人はお客さんだ。立派な旦那だ。ちつとも怖くはない。」

「いや、怖いよ、怖いよ。」

気がつくとも裏口に飼つてゐる二匹の犬もさかんに吠えてゐる。それが山峽に響いて主人も身ぶるひするやうな凄さを感じた。

主人は子供を抱きしめながら考へた。

「畜生！ あの洋服男は狐かも知れないぞ。焼鳥の匂ひにつられてばけて來やがつたんだ、きつと。」

山峽の人は狐がばけることを信じてゐる。だから、犬が吠えたり、子供が怖えたりするので狐を想像したのだ。

「鐵砲を射つてやらう。狐なら正體を現して逃げるだらう。」

主人は子供をつれて裏口からこつそりと外に出た。

月は美しく冴えてゐた。秋の蟲がしげく啼いてゐた。犬はしきりに、家の中に向つて吠えてゐる。

主人は鐵砲に彈丸をこめると、空に向つて一發ズドン！ と放つた、彈丸が螢のやうに飛んでいつた。

更に一發、夜の靜寂を破つて發射した。

そつと、家の中をのぞくと、紳士は平氣な顔をして煙草をのんでゐる。

「狐ぢやない。」

主人は思つた。

が、犬は吠える。子供は矢張り泣いて怖える。

「どうしました。狐でもゐたんですか。」

紳士がきいた。

「へえ。」

主人は答へた。



「父ちゃん、あの怖いから歸しておくれよ。怖いよ。ね、怖いよ。」

妻をなくしてから母のない子を熱愛してゐる主人は子供の怖えが甚だしいのと、犬があまり吠えるので、紳士が薄気味悪くなつて來たので決心した。

「旦那、まことにすみませんが、お泊することが、出来ません。」

「どうして。」

「實は子供が旦那を怖ろしがるものですから。」

紳士は顔色をかへた。わなわなとからだをふるはせた。

「お願ひだから一晩泊めて下さい。」

「それが今もいつたやうに子供がこの通り泣いていやがりますので。」

「困つたな。」

「私も困ります。すみませんが出ていつて下さい。」

紳士はつと立上つた、だまつて靴の紐をむすびはじめた。戸を開くと、犬が更にけたましく

吠えた。紳士は逃げるやうに去つて行つた。

十分間ばかりも経つた頃に又もや表戸をはげしく叩く者がある。

「開けてくれ。」

主人は氣味が悪くなつたので返事をしなかつた、子供は、怖えつゝ更に縋りついて來たのだ。

「おい、開けてくれ、私だ、駐在巡査の松野だ。」

確かに松野巡査の聲である。

主人は表戸を開けた、巡査は和服で突立つてゐる。

「早速だが、お前のところに洋服を着た四十ばかりの男が來やしなかつたかい。」

「参りました。」

「泊つてゐるかい。」

「ことわりました。たつた今、ここを出て行きました。」

「今、さうか、有難う。」



巡査はたちまちに山道の方へ走り去つた。

と、思ふと、白樺の密林の方にあたつてはげしい人聲が起こつた。主人は、鐵砲を持ち出してその方向に走り出した。

が、向うからさつきの洋服男を縛りあげた巡査が山を下つて来る姿を見た。

「旦那、つかまりましたか。」

「有難う、わけもなく捕へることが出来た。おかげで大手柄だ。」

「旦那、その男は、何か悪いことでもしたのでございますか。」

「人殺しなんだ。越中で、若い女を殺して逃げて来た悪いやつだ。向うの警察からの手くばりでこゝに逃げ込んだことが分つて追跡して来たんだ。」

「人殺し！」

主人はぞつと身ふるひをした。

犯人は深くうなだれて顔もあげなかつた。そして、巡査に護送されて山道を下つてゆつた。

月は、彼らにもあざやけく照り浴せてゐた。巡査の提灯が人魂のやうに遠ざかつてゆく。

家に歸つた主人は子供に向つて云つた。

「あの男は怖ろしい人殺しをしたやつだが、俺は不思議でならない。人殺しときけば俺も怖ろしくなるがお前は、何も知らないのにあいつが怖ろしいといつた。どうして怖ろしい男だと分つたんだい。」

子供はまだ唇を紫色にしてふるえてゐた。

「父ちゃんは見なかつたのかい。」

「何を。」

「怖ろしいものを。」

「何も見やあしなかつた。」

「父ちゃん。あの人がすわつてゐただらう、あの時にさ。」

「何かあつたかい。」



「背中にだよ、あの人の背中に、血みどろになつた髪を振亂した若い女の人が、怖ろしい顔をしておんぶしてゐたよ。」

「えつ。」

主人は總身に水でもぶつかけられたやうに怖えた。

「そしてね、あの人が出て行つただらう、その時にさ、おんぶしてゐた若い女が、背中からはなれてあの人の後からふわふわと歩いて行つたよ。そして、家の戸口まで行つた時、父ちゃん、俺の顔を見て、ニタニタと笑つたんだよ。」

主人は眞青になつて子供に抱きついた。

痴情ゆえに女を殺した彼は糸魚川警察署でおびえながらいつた。「悪い事は出来ません。女を殺して逃げ出すと。たつた今殺した女が血みどろの姿そのまゝで私の背に縋りついてゐるんです。逃げて逃げてもはなれないんです。冷たい手で私の襟首をぐいぐいしめつけます。ですから、こんな怖ろしい目にあふのなら死刑になつた方がましだとさへ思ひました。捕まつてから女の幽

霊は私の背中からはなれてしまひました。でも、今でも、冷たい手が私の咽喉に蛇のやうに巻きついてゐるやうな気がしてなりません。」

涙が、頬を傳ふと、留置場の床にほとほとこぼれてゆくのであつた。

### 里人の古説 (佐々良峠)

千古の雪をたゞへてゐる日本アルプスの中に秀麗な姿をそり立てゝゐる立山の地獄谷——そこには死せる人のすべての亡霊が集まつて肉線者が訪ねゆくとありし世の姿を現はすと麓の里人の口に古くから説かれてゐた。

信州松川村——いまの信濃松川驛附近——に昔、愛しあふ夫婦があつた。若い二人は世のわづらひも、何の屈託さへ感ぜず過してゐた。が、夫はふとした病がもとで、歎き悲しむ若妻を残して歸らぬ旅路におもむいた。

残された若妻の歎きと悲しみはたゞ日も夜もなく溢れる涙であつた。惱める心を抱いて狂はし



い日のみを送り迎へたが、夫戀しのあう惱になやんでゐた彼女は、ふと地獄谷のいひ傳へを聞いた。思ふも恐ろしい黒部の谷も、難所として屈強な壯者さへおのゝく佐々良の峠も、夫に逢へるなら何の苦しみがあらう。たとへ亡霊であつてもいゝ懐かしい夫の面影を見ることが出来ればどんなにうれしいであらう——さうだ逢ひにゆかう——たゞ一筋にその傳説を信じた彼女は、さながら夢遊病者のやうに山を志した。

山又山、さすが險そな道も彼女にとつてはたゞ名ばかり、忍耐と熱情とに燃えた彼女は漸く佐々良峠までたどりついたのであつた。

時は秋の終りに近く、山は既に雪に埋められてゐた。しかも激しい吹雪は山おろしと共に襲來して、山も谷も、そして夫戀しさにたどりゆく彼女を埋めてしまつた。彼女の死體は永久に發見されない、けれど吹雪の夜になると、地の底から響いてくるやうに夫の名を呼ぶ若い女の聲が今も聞ゆると云ふ。

### タラの木様 (有明山)

日本アルプスを突破する人々が上高地に出るために通る信濃鐵道の池田檜川驛から約十五丁、有明山麓に中天高く突立つ老木を見らるであらう。大樹の周囲は石の玉垣をめぐらし、しめが張られてゐる。

人々はこの老木を「タラの木様」と呼んでゐる。

平安朝末期の頃、身分いやしき男と熱き戀におちた上藤が都にゐたまらず、手に手をとつてみすゞかる信濃路さしてのがれ有明山の麓までたどりついた時、かねて、身重になつてゐた上藤は月満ちて一女をあげた。

けれど、乳房がしなびて乳が出ない、嬰兒は死んでしまつた。悲嘆にくれた二人は止むなく愛兒のなきがらを地に埋めタラの木の芽をさした。そして、彼らは有明山の山峽にかくれ住んだ。

墓の前にたむけた木に根を生じて生長し今では四抱へもある大木となつた。いつの頃からか村



人はタラの木様とたゞへるやうになり、遠く數里の外から乳のない婦人が參詣に来る。  
 元龜三年春、わざ／＼奈良の春日大神をこゝに勧請して一祠を營んだが、その後有明山社に合祀し、今ではタラの木様のみ昔ながらの姿で残つてゐる。

脊のび (有明山)

有明山は昔——毎日すこしづゝ高くなつて居つた。未には日本一の高さになるだらうと思はれた。ところが或日、一人の妊み女が立小便をしながら山を見て冷笑した。  
 「毎日、毎日、あんなにもち上つて、つまりはどうする分別かしら。」  
 その日、その時から有明山は高くなることをやめた。

山鳥の征矢 (有明山)

有明山の麓——古うまやに昔、彌左衛門といふ藥草採りがあつた。ある日、いつもの如く山へ

分けいつたところ、山賊八面大王のためにどこかへ捜はれてしまつた。残された妻は泣き悲しみつゝ、すべての希望を三歳の愛兒彌助の成長につないでさびしい日を送つてゐた。

彌助が二十一歳のときである。親孝行な彼は、極月廿八日の寒い日、母の言付で穂高町の暮市にゆく途中、とある小松の陰に大きな山鳥がわなにかゝつて、もがき苦しんでゐるのに出會つた。憐れみ深い彌助は懐中してゐた五百文をわなにむすびつけ、山鳥を放つてやつた。鳥はうれしさうに羽ばたきして山の彼方へ遠く飛び去つた。母もその話を聞いて共に喜んだ。

一兩日後の大晦日のたそがれ彌助の家へ十七八の世にも美しい娘が寒さにふるへながら訪ねて來た。唇の色は寒さの爲に紫色に變つて居る。

老母は火を燃やして女を温めた。あつかゆもすゝめた。  
 夜になると吹雪と變じた。朝になつても止まずに、魔の如く狂つて居た。

「ひどい吹雪です。とても、歩けはしませんから、雪の晴れるまで泊つておいでなさい。」  
 老母はすゝめた、女は喜んで滞在した。



女の美しさ、やさしさは彌吉母子の心を引つけた、母は女に向つて嫁になつては呉れぬかとのんだ。

「私のやうなものでもよかつたら」と女も喜んで承諾した。

よき妻であつた。そして、一家には幸福そのものゝ日と夜がつゞいた。

有明山を根城にする鬼族の首魁八面大王はその後も、數多の眷族を抱へ、村里を襲ふては財寶を掠め美人をかどわかし暴虐の限りをつくして人々を恐怖させた。

その頃、東征の途にあつた坂上田村麿は、人々の危難を援ふべく下向して機略をつくして鬼族を攻めたてたが、神通自在の大王には一指も染めることが出来なかつた。

一夜、田村麿は觀世音のお告げによつて、三十三節ある山鳥の尾の矢を用ふれば、鬼賊を退治するにわけはないことを知つた。そこで、近郷に觸を出して三十三節の山鳥の尾の矢を持參するやうに命じた。

「いよいよ父の仇を討つ時が來た。」

彌吉は喜んだ。日夜山鳥の尾をさがしまわつたが、年數を経た山鳥はなかなか見當らなかつた。

「わたしが探して來ませう。」

妻は云つた。そして、ゆるしを受けて山へ向つた。その夕方、美ごとな山鳥の尾を持つて歸つてきた。

「おう、これこそ立派な山鳥の尾だ。いつに變らぬお前の働きは嬉しい。が、山になれた私どもさへ手に入れられぬこの品を、どこから持つて來た。」と彌吉は喜びながら訊いた。

妻はもう涙ぐんで居た。

「わたしは先年、助けて戴きました山鳥でございます。せめては召使になりともなつて御恩に報ゐる考へで參りました。そして、身にあまるお愛しみを受けました。お恩報じに私の尾をもつて來ました。魂がこもつて居る矢です。どうぞ、最後の御奉公として御用立てゝ下さいまし。」

言葉が終ると女の姿は消へた。

彌吉は矢を田村麿に奉つた。さしもの八面大王も、念力のこもる矢面には双向ふ術もなく遂に



滅びた。

彌吉は恩賞にあづかつた。が、よき妻を失つたさびしさにたへられなかつた。

### 正福寺の不動明王 (有明山)

有明村の魏磯城の窟觀音の本寺正福寺には木食上人作準 厩觀音の外に國寶の價値ある不動明王の立像がある。木像の彩色で丈五尺四寸、實に古いもので不動としては珍らしい恰好をしてゐる。鎌倉最盛期時代に於ける七條佛所湛慶の作と傳へられ、又體內佛は行基菩薩の作と云はれてゐる。この寺は養老三年信濃守佐伯沙彌麿の創設にかゝるもので、天平年間には國守院神籠寺と云つたが後高山寺、神宮寺、明王院とも云つた。金堂の不動堂は明治廿五年火災の爲め焼失し今は假堂で本尊の不動明王もその時は危ふく焼かれんとし、漸く助け出されたが背後の火炎だけは焼失し今の火炎は木食作の觀音を塗つた佛師が造つたものだといふ。

正福寺の隣りはすぐ有明山神社だ、祭神は手力雄命、其他三神でこゝを里宮と云ひ有明山の山

頂に奥社がある。社傳によれば上古天表春命の創祀にかゝり、孝元天皇の五年社殿の經營をなし本來大養、阿智、安曇の名族が祭祀を掌つたといふ由緒深い社だ。承久の亂に官軍に味方し、加賀の黒坂に戦つて遂に敗れた忠臣信濃守仁科盛遠をして後鳥羽天皇が奉納せしめた。

かたしきの衣手寒く時雨つゝ有明山にかゝる白雲

過ぎぬるか有明山のほとゝぎすもの思ふ時も厭ひやはせぬ

の御製並に鍛冶官大隅權守久國作の太刀一振り將軍坂上田村麿が奉納したと傳へられる古代刀劍曲玉管玉を始め古器物、武器類其他文書、繪畫の寶物は今も二棟の寶藏に所狭きまで陳列整理されて居る。

### 神籠石 (有明山)

有明山腹の有明村の觀音堂下の魏磯城の窟は、名の如く岩窟をなして居るが、これは古墳の一つだ。由來有明村には村内到る所非常な古墳が多く既に知られたものだけでも其數五十を



算してゐる。

其の内重なるもの約十個、崩れ込み若しくは破壊したもの約二十個、既に發掘されたもの約二十個、一村に之れだけ多くの古墳のあるといふ村は恐らく他に類を見ないであらう。その中でも魏磯城の窟はその盟主とも云ふべきもので此外峻塚、祖父ヶ塚連塚、祝ひ塚、大養塚、縣塚、耳塚等は相當名の知られたものだ。

天の岩戸のその昔手力雄命のつてなげた。岩戸が此地へ落ちたので有明山を昔は戸放嶽と云ひ其後手力雄命は此處に天降り鎮座しました遺跡が魏磯城の窟だと傳へられてゐるので里人はこの窟を「神籠石」とも呼んでゐる。

塚口は東南に向ひ、天井石は花崗岩の一枚岩で壁石は縦長の長石を併立してあるがこの點はたしかに他の古墳と趣きを異にしてゐる。天井石は縦二丈七尺八寸、横二丈五尺、厚さ八尺七寸といふ素敵滅法大きなものでよくこの大石が積み上げられたと驚かされる程だ、窟内だけでも縦一丈六尺九寸幅入口五尺中央七尺五寸奥八尺五寸高さ五尺あり入口天井石の前面にも三體の觀音像が

彫刻されてゐるがこれは、後世誰か刻つたもので大したものではないらしい。

大正十年文學博士鳥居龍藏氏はその窟を視察して「此の窟はドルメン式古墳の一種テーブル、ストーンと云ひ、我國最古に於ける日本固有民族の遺物で、こんな珍らしい古墳は日本全國に於いて他に容易に見ることは出来まい」と推賞して學界に發表した。その後史蹟保存に指定されたが、それだけに有明村の人は、この古墳あることを村の誇りとしてゐる。

### 信の宮（有明山）

鬼を祀つてあると言ひ傳へられて居る信の宮は、有明山を真東におりた馬羅尾谷に淋しく建つてゐる。

むかしこの近くに久兵衛といふ百姓があつた。一子信太郎は或年の事、友達數人と馬を追つて、笹刈りにいつた、途中馬羅尾谷まで行くと、信太郎は突然馬の背中に立ち上り、身を躍らしたかと思ふ間もなく天狗岩といふ大きな岩の上にとび上つて了つた。呆氣にとられた友達があれよあ



れよと見て居る中に信太郎の背丈は次第に伸びてとうとう頭が雲の中へ入つて了つた。友達は驚きの餘り物をも言へなくなつてゐると雲の中から雷の様な信太郎の聲が聞えた。「さらばよ／＼」と言ふその聲は山から山に木精して静かな馬羅尾谷に響き渡つたがそれと同時に、天狗岩の上に立つて居た大きな信太郎の脚は馬羅尾谷を一跨ぎにして山から山へと姿を消して行つて了つた。

百姓久兵衛の悲嘆は一方ではなかつた親一人子一人の淋しい家庭から、杖とも柱とも頼む子供をなくした久兵衛は明けても暮れても涙のかはくひまもなかつた。

そして廣い田の植付や收穫を、老の身一つでどうしたものかと思案に暮て、益心を暗くするのみだつた。

所が不思議な事に、五月になると鐵一つ入れた事のなかつた久兵衛の田畑は一夜の中に立派に水田に變り青々とした早苗がそよ吹く風になびいて居た。久兵衛の驚きは一方でなかつたそして秋になつて、黄金色に實つた稻が又もや一夜の中に綺麗に刈取られて積上げられてあつたので久

兵衛は益不思議に思ふばかりだつた。

かうした春秋は三年の間いつも同じやうに繰返された、久兵衛はこゝに於て初めてこれは雲隠れした一子信太郎の仕業だらうと思つて馬羅尾谷に祠をたて、彼を祀つた里人は、久兵衛は鬼になつた子供を祀つたと口々に噂し合つた、そして信太郎の宮と言ふのを略して誰いふともなく「信の宮」と呼び傳へたのである。

今でも此信の宮は里の方に背を向け山に正面して居る。

### 仁科氏の城址 (木崎湖)

北アルプス有明山麓木崎湖の西南隅には仁科盛遠の居城址が残つて居る。

七百餘年前の昔——承久の變のあつた同三年五月、連峰の雪をあとにして盛遠は勤王の旗を押し立て、残雪をふんで北陸路に出でた。そして、日本海の荒波狂ふ親不知の嶮所で北條朝時の大軍を迎へて激戦を演じた。



が、戦は破れた、收軍の將は、傷いた部下をまとめて白馬の嶮所を縦走して信濃に歸つた、そして、山里に消え残る雪の中に紅く咲き出づる杏の花の散り落つる夕、あはれ、花片を血に彩つて礪波山に最後を遂げた。

有明山の南麓にある手力雄命を祀つた有明神社は盛遠が營んだもので後鳥羽院から御製や御刀を賜つたといふ。

有明神社の別當としての宮城不動堂は今から千二百餘年前の養老三年に信濃守佐伯沙彌麿の設けたものである。

### 雜 志 橋 (島々)

白骨温泉に行く途中、梓川の激流を挟んだ橋場村と島々村をつなぐ一つの橋——それが世に名高い戀の雜志橋だ。

昔——島々村の百姓平作の娘にお節と呼ぶ、近隣切つての美少女があつた。

お節が十七の秋、その年はひどい不作で、只さへ貧乏な平作は、女房のおたみに長の患ひの後に死なれた後なので年貢金も納められぬ惨めさだつた。

平作が毎日々々の金策に賽れ果てゝゐるのを見て、

「それちや俺が貸して遣らう。」

と、進んでいつて呉れた者があつた。それは因業親爺と近隣に綽名される橋場村の金持、太左衛門である。

平作が目前に是非とも入用な金は何彼と合せて十五兩といふ大金、その大金を、縁もゆかりもない因業親爺の太左衛門が無造作に貸さうといふのだ、最初平作は戸惑ひした。借りていゝのか悪いのか、急には決心もつかかなかつた。

が、必要に迫られた金である、年貢金を納めねば自分は代官所に引かれて牢屋へぶち込まれて了ふ。後に残つた子供達——わけて母親の亡い子供は可哀相であつた。平作は、善悪可否の判断もつかぬうちに、つい太左衛門の申出に飛びついて行つた。



借金は返した。年貢も納めた。だが、それはそれとして、貧乏な、その日暮らしの平作に、な  
んで十五兩といふ大金がおいそれと返済出来よう、平作は今度は太左衛門への借財に苦しまねば  
ならなかつた。

すると、太左衛門の方から、借金の抵當に娘を女中奉公に寄せといつて来た。しかも五年の  
年期、それで十五兩の棒引きをしようといふのである。

平作は可愛い娘を、人使ひの苛酷だといふ太左衛門の處へ女中奉公に出さねばならなかつた。

だがお節には戀しい男があつた。それは同じ島々村の若者、清兵衛といふ眉目美しい男である。  
そしてそれは父親も暗黙のうちに許してゐる間柄でもあつた。

お節は戀人の清兵衛と別れて五年も長い間村を離れてゐることは厭だつた。しかし、父の窮状  
を救ふためにはその外に執るべき手段もなかつた。彼女は遂に泣く／＼梓川を越えて隣村橋場の  
太左衛門方へ奉公に行つた。

川一つ隔てた村——といへば直ぐ隣のやうにも聞こえる。然し、梓川は渡るに橋の無い激流だ

つた。若しお互に隣村へ行かうとするなら、數里も川下を迂廻して行かねばならぬ。往復十里、  
しかも通路の不便な時代のこと、この隣村との交通は中々の難事なのであつた。

お節は太左衛門の處へ奉公に来てから、戀しい清兵衛の便りは勿論、親兄弟の安否さへ容易に  
聞くことが出来なかつた。

一方、太左衛門がお節を女中にと望んだのには深い野心があつた。否、その野心は平作に金を  
貸す時既に胸に藏されてゐたことなのだ。

今、野の百合にも似た可憐な容姿の彼女が、朝夕召使ひとして侍づくのを見ると、太左衛門は  
身うちに沸る淫慾に驅り立てられて、機會さへあればと爪牙を磨き始めた。

だが、太左衛門には人一倍嫉妬深い女房があつた。この女房の眼が始終召使ひの女達の上に光  
つてゐるので、流石に太左衛門も迂廻にお節へ手を出すことは出来なかつたのである。

かくて一年が過ぎた。お節は益々美しくなつた。だが、彼女は別れ住む戀人のことを想つて毎  
日遣る瀬ない胸を抱へてゐた。



川一つ隔てた島々村！ そこには懐かしい親兄弟がゐる。そして、戀しくて戀しくて胸も切ないばかりな清兵衛が……。

彼女は、今更に梓川に橋の無いことが怨めしかつた。お、橋さへあつたら僅かの暇にも戀しい人に逢つて來られる。橋！ 橋！ だがしかし、この兩岸の岩壁に圍まれて狂奔する激流を見よ！ そこには人智を嘲笑するが如き自然の威力、否魔力があつた。この急勾配の激流に、どうして易々と橋を架けることが出來ようぞ。お節は悲しくうなだれた。

しかし、戀する若人の一念、熱情、お節は遂にこの激流へ橋を架けやうと決心した。

金！ 金！ 金さへあれば、そしてそれを遣り通す熱さへあれば、なんのこの世に出來ないことがあらうぞ！ かくて彼女は一意金を溜めることに腐心した。借金代りの奉公故ままとまつた給金は貰へなかつたが、それでも益暮れの心付けや正月の祝儀、その他、流石は物持ちの家だけに色々貰ふ物も多かつたので、彼女はそれをすべて金に替へた。

このお節の決心を、それときかされた清兵衛は、女の眞情に泣いて喜び、自分も協力して架橋を實現さすべく、それからは家業の傍ら日傭取りや薪拾ひなど背身惜まず働き出した。

かくする間に二年の歳月が経つた。その間、機を見ては云ひ寄る太左衛門の魔手を拂ひ退け、お節は苦しくも辛い明け暮れを迎へながら、架橋の喜びを夢に描き、そして年明けの日を只管に待ち侘びた。

だが、架橋の願望が如何に火と燃え熾らうとも、たかが若い二人の零細な稼高どうしてこの難事が短時日の間に實現せられやう。苦しく遣る瀬ない月日が二人の上に情なく流れて、やがて六年目、お節の年明けの日が漸くに來た。

お節は喜んだ。架橋の望みは兎も角も、五年間別れ／＼になつてゐた戀しい清兵衛の許へ歸れると思へば、胸は歡喜に高鳴り、情熱に打ち震へるのだつた。

だが然し、因業親爺と評判の太左衛門は、愈々本領を發揮して來た。彼は年期の明けたお節に對して、更に二ケ年の禮奉公を強要したのである。そして、それが不服なら、十五兩の借金を返せとの難題だ。



そんな無茶が、しかし其時代は通らぬこともなかつた。お節は泣く／＼この強慾な主人の申出を承諾せねばならなかつた。

お節はすべて忍ぼうとした。だが、血氣盛りの清兵衛はこんな不法に忍従は出来なかつた。殊に、お節の口を通して太左衛門の野望を知つてゐる彼は、そんな危険極まる處へ愛する女を一日でも長くは置きたくなかつた。

遂に彼は決心して或る夜只一人、磨ぎ澄ました草刈鎌を片手に橋場村の太左衛門方へと押掛けに行つた。まかり間違へば太左衛門の命を脅かしてでもお節を連れ戻して来る決心だつた。

不便な道路を五里も歩いたので、橋場村へ着いたのは最早夜更けに近かつた。太左衛門の大きな邸宅は、門を嚴重に閉ざして静まり返つてゐたが、清兵衛は奇智を用ひて門番に表門を開かせた。驚く門番が留め立てする間もあらはこそ脱兎の如く奥の間へとちん入して行つた。

枕を蹴られた太左衛門は仰天して床の上へ起き直つた。

「お節を戻せ。俺は平作の代りに来たんだ。」

清兵衛は鋭い鎌を突きつけた。

「何を！ あの女は借金の抵當だ。」

太左衛門は年甲斐もなく度膽を抜かれながらも、強いて虚勢を張つて、

「みんな出て来う、泥棒だぞ」

と大聲に呼ばはつた。

「何つ、どこ迄もお節を返さぬか」

清兵衛は怒つて鎌を振上げた。

「待つて下さい」

この時、壁と共に飛出して清兵衛に纏りついたのは太左衛門の女房だつた。

「あなた、平作さんの代理の方とやら、わたしは太左衛門の女房おりぐでございます。良人が重重悪いことはわたしも承知して居ります。どうか何にも申しませんからお節を連れ歸つて下さいませ。」



「これおりく、何をさす」

答め立てする太左衛門へ押被せるやうに妻は云つた。

「いいえ、いいえ、これといふのもみんなあなたの邪慾から起つたこと。あなたの悪い癖が何時になつても直らぬばかりに、今夜のやうな間違ひが起るので。それに引替へお節は、こんな主人の許によくも今迄辛抱して呉れました。さあさ、お節や——」

おりに呼ばれる迄もなく、お節は騒ぎを聞きつけて他の召使ひ達と共に入り口まで来てゐたが、今眼のあたり戀しい人の姿を見てもそれと縫りつきもならず躊躇らつてゐたのだつた。

「お節、今夜からお前は自由の身、假令日那が何といはうとわたしから立派に暇を上げます。さあこの人と一緒に親許へ戻つてお呉れ。」

おりにくは一方太左衛門を説きなだめながらお節に何彼と饌別の品などを與へた。

二人は遂に戀の勝利を得た。思へば長い忍苦の月日だつた。がそれも、新婚の甘い陶酔に酬ひられて、一つの思ひ出話にならうとしてゐた、かくて楽しくも幸福な月日が夢のやうに二人の

上を過ぎたのだが——。

然しながらお節は、かの架橋の願望を一刻も忘れることは出来なかつた。彼女は最初、戀のため架橋のことを思立つたのであつたが、その戀が成し遂げられた今では、今度は一生の事業としてその實現を計るべき希望に燃え立つた。清兵衛とても愛する妻の希ひに何の否やがあらう。

それから、二人は心を合せて、この大事業の基金を得べく働いた。安閑と人並みの生活を送つたのでは餘裕など出よう筈はない。二人は遂に明暮れ貧しい雑炊生活に甘んじるやうになつた、そしてそれが十年、やがて二人は二百兩といふ、その頃の水呑み百姓には夢想だも出来ぬ程の大金を見事積み上げたのだつた。

かくして架橋工事は創められた。難工に難工を重ねて三ヶ年、遂に二人の努力は酬はれる時が来た。見よ、激流を眼下に蹴下して架けられたその立派な橋を。

世人これと呼んで戀の難志橋といふ。まこと、人の世の戀と熱の力で出来た橋だ。



梓川のお里（梓川）

遠い／＼昔、長い重苦しい冬が、明るい浮き／＼した春に變る頃が來れば、雪どけのぬかるむ山道を踏みしめてこの梓川部落へ、必ず善光寺の里から古着の旅商人の一群が登つて來るのであつた。

山峡の女達は、この旅商人の一群がさながら「春」を運んでくるかのやうに喜ばしく、胸とどろかせて待ち受けた、まことに冬ごもりの雪に疲れ果てた心には、新しい訪問者のもたらす、珍しい話題や華麗な衣類の色彩は、又無き贈物に違ひない。

梓川の奥の「入りの地」に住む淋しいお里も、またそのやうに旅商人の楽しい足音を待ちこがれたけれども、お里の求めるのは美しい衣類や珍しい話題ではなくてやさしいけなげな古着屋のお助であつた。

夫に先立たれたお里は哀れ二十七歳の色ざかり、そと握れば掌の中にとけて消えさうな、その

桃色の乳房は、また離せば胸一ぱいに、ほの／＼と大輪の花のやうに、咲き誇る年頃だ、濃情的な心と精力的な身體で死ぬばかり一づに戀人を思ひ悩むのは無理の無い事であつた。

春が來た。

雪解けのぬかるむ山道に、わらちぬらして、古着商人が登つて來た。

お助の若々しい男振りが一段と光つて見えた。

さて、お里の家に、夢のやうな幸福が來た。……

或る日のこと――

その日もお助は朝から入りびたりだ。惱ましい、盡きせぬ戀のされ事のあとで、お里は留守居をお助にたのんでとなり村まで用事に行つた。

すると驚くべき事には、その用先の家には、ほんの今しがた家に残して來た許りのお助が古着の包みを家中一ぱいにぶちあけて商賣をしてゐるではないか。

「あれ！」



の所に歸つたら豆炒りでもさせて、便所へでも行つた風で席をはづして御覽な、」  
 お勝婆さんも力をつけた。  
 何食はぬ顔で我家へ歸つたお里は、高鳴るむねを押し鎮めながら、  
 「おや、さぞ待遠でござんしたらうねえ惣さん。」  
 と、もたれかゝつて疑ぐれば、又のやうにつめたい男の肌を愛撫しながら、豆いりをたのんで  
 そつとその場をはづした。  
 一方お勝婆さんは、膽の太さうな眉をびく／＼させて様子いかにとお里の家の裏口からのぞき  
 込んだ。その瞬間その圍爐裡のふちに見たものは、……  
 あゝ、これぞうるしの様に底光る恐ろしい蛇體の總てであつた。  
 背は妖しき黒髪のやうにうね／＼と、腹は女の生血で染め出したものゝ如く赤々と、二丈にも  
 近い巨蛇が、いまし、二階から尾をたれて圍爐裡の鍵にぎり／＼巻きつけ尾先で豆を掻き廻して  
 ゐるではないか。

お里は、驚きの聲を胸先で押し殺して只眼を見張つた。まさかこの他人の前で「惣さん、あれ  
 ほどたのんだ留守居はどうしたのさ」と尋ねる譯にはゆかない。また當の惣助も一向知らぬ顔の  
 半兵衛をきめ込んでゐる憎々しさ。したが、第一、里の男の惣助が、この山道をどう急いだもの  
 としたとて、お里より早くこの家を訪れ、このやうに品物をひろげてゐられるわけがない。  
 不思議お里は見る／＼眞つさをに顔色をかへた。  
 名も姿もそつくり其まゝの男が二人居るお里は顔色かへて我村へ引返した。  
 お里は油汗をつめたく額にたぎらせながら隣家のお勝婆あさんにこの奇怪な一ぶしちうを物語  
 つた後  
 「そういへば、わたしや常々惣さんの忍びやう隠れやうの巧さを不思議なものに思つてゐました  
 のさ。」  
 と、不審がつた。  
 「ふん、成程ね、これはてつきり魔性のものかも知れないよ。私が正體を見極めてあげるから男



一閃の水のやうに戦慄がお勝婆あさんの背筋をつんざいたかと思ふ許り。けれども氣丈なこの老女は尙も息をのみひとみを凝らして凝視を續けると――。

お里は間も無く歸つて來た。

此物音に大蛇は風宛らの身軽さで二階からするんすべり下り、そのまゝお里の横座にとぐるを巻くのであつた。

お里もやがて、恐怖を忘れたか、いとほしげに大蛇の眼を見やれば、大蛇も鎌首をつと立て、焰吐く舌をなめづるのだ。これがお里には男の笑ふとも見えただのであらう。其熱れ切つた三十近い戀の五體をなよ／＼とくねらせて、愛慕なみだの雨にぬれながら、心ゆくまで世にも怪しき蛇性の淫に身をまかせるのであつた。

聖朝のこと、お勝婆あさんはお里を我家へ招いて、かの女が蛇體戀慕のありさまを事こまかに物語つて聞かせたが、お里は焰のやうな戀心にたゞ白々とうなだれて、

「寝肌こそ氷のやうにつめたい人だけれど、まさか惣さんが魔界のものだとは？」

と尙も淡い疑ひに嘆くばかりだ、お勝婆あさんは云つた。

「だからさ。お前さんの得心のゆくやうに、ちやあんと正體を見せてあげるから、今度來た時には、男の着物の襟元へ針で麻糸を縫ひつけて御覽な。」

お里は半信半疑の心で我家へ歸ると、果して惣助はお里の姿を待ちあぐねて居た。で、お勝婆あさんが教へた通り襟元へそ知らぬ顔で麻糸を縫ひつけて、男が歸つてから調べて見ると、麻糸はズル／＼裏の土臺の下をくゞり、草むらや笹箆を通り抜け、をろち住む梓川のナメラ淵へと、續いて居るのであつた。

お里の胸は悲愁の嵐だ。

むちの様に涙が心を打つ驚きや恐れよりも、先づ身も碎けよと泣き入るのであつた。

戀ゆゑに、雨の朝も風の夕も又無き喜びのうちに明け暮れたのに、その生命ぞと願ふ戀こそは、何といふ呪はれの陽の下に育つたものであつたか！

そのまた聖朝のこと。



惣助の姿を借りたナメラ淵の主は再びのこく／＼やつて來は來たが、只ならぬお里の嘆きを見るや、忽ち見破られたと知つて一筋の黒雲を呼びおこし大蛇の正體を醜く現して逃げ去つた。

お里は哀れ此とき既に身ごもつてゐた。そして間もなく灰色の蛇の卵を一斗も生んだ。親切なお勝婆あさんはその一斗もの蛇の卵に煮沸をぶちかけ地中深く埋めてしまつた。

其後ほど經て村の男がナメラ淵の付近を通り過ぎると小さな蛇が岩の上に眠つてゐたので上から大石を突き落とすと、大蛇の姿を現はして岩の下敷となつて死んだ、蛇體から流れた血は、ナメラ淵の水を眞赤に花のやうに彩つて、梓川の流れば數日の間濁つた。

これが、あの人間の女に戀した妖しき蛇體の最後だと知ると悪戯な村の男はのけぞり返つて驚愕し歸宅するや身體から火を吐くばかりの高熱を發して倒れてしまつた。

いまは醜い枯れ木のやうな大蛇の死體は梓川の人々の手に依つて幾つかに切斷され俵に詰めてナメラ淵のほとりに厚く埋葬されたのはいふまでもない。

ナメラ淵！ ナメラといふ奇怪な響きを持つこの名は「蛇」といふ方言だといふ。

### 秀綱の死（徳本峠）

山は永遠に神祕である、壯嚴である。けれど、山にも人の足跡が残る限り、人がつくつた幾多のローマンスを傳へて居る。山——靜寂の山にも哀しい人間の運命を認めて居る

北アルプスの玄關口ともいふべき徳本峠をよちる人々は哀しい山の秘話を一度はしので頂きたい。

天正十三年八月のこと。飛騨高山の松倉の城主三木休安の舍弟秀綱は關臣秀吉の臣金森長金に攻められて敗没した。

深夜、夫人と子供と侍女らを連れて、平湯街道から忍び姿で落ち延びた。落ちゆく武將の姿は哀しかつた。

夜が明けた。大勢で逃げることは危険なので、島々での再會を約して、奥方に侍女をつけて別れた。



女の足弱ながら峻しい山道を辿り辿りつて奥方たちが上高地から徳本を越える峠へさしかまつた時である。山賊らに捕へられた。そして、大きなそまの木に縛りあげられた、持物はかすめられた上殺されてしまった。

数日は経た。山賊が死體のところに来て見ると、奥方は無念さうに眼を見開いてゐた。山賊を見てニタリ／＼と笑つた。

「わッ！」

あまりの怖ろしさに悲鳴をあげて逃げ歸つた山賊は發狂した、怖ろしいと叫びつゝ狂ひ死んだ子孫は天刑病に祟られた。

一方、秀綱は愛子を連れて、安房峠を越え、白骨から奈川村澤渡まで逃げて、農家のわらの中にかくれてゐた。追手はせまつた。農家を怪しんで探したが、行方が分らないので、藁をもやして農家に火を放つた。秀綱は哀れにもその火の中で焼死した。

登山者は島々谷の深い峻谷に沿つて一里半を登つたところに二抱へもあるさはらの大木の切り

株と「秀綱奥方遭征の場所」とある立札を見るであらう。

### 旅人と小狐 (徳本峠)

秋ぐちの青白い月が、絹ぼんぼりのやうな美しい光をたゞへて、ぼつかりと浮いてゐる。白銀の小さな半鐘を、象牙の小さい槌で、靜かに打つてゐるやうな鐘たゞきの音が、ちらばり咲いてゐる釣鐘草のかけから響いてくる。草原一めんの穂すゞきが、白いやはらかな尾をふりかたむけて、とほく、ほのぼのと月にさゞやいてゐるかのやうである。

この靜かな夕暮のすゞき原を、旅人がひとり大きな袋を肩にかけて、口笛をふき鳴らしながらよこぎつて行つた。

やがて草原のかけの丘に、旅人は腰をおろし、火うち石をたゞいて、スバリ／＼と煙草をふかしはじめた。青いけむりのゆくへに、なにげなしに、目を投げてゐると、一株三株、咲きしづんでゐる桔梗の花が、旅人のさみしい心をひきつけた。旅人は、紫いろに匂つてゐる桔梗の花を、



ちつとみつめてゐた。そのときどこからともなくすきとほるやうに美しい娘が、すゝきをわけて旅人のそばへ近づいて来た。娘は、白地に萩の花の模様を染めぬいた着物をきて、みづみづしい桃割れに、女郎花の花を、二三輪さしかざしてゐた。

「いまごろ、どちらへ。」旅人は不審に思つて娘に聲をかけた。

「母親が病氣をしてゐるので、町のお医者さんへ、薬を貰ひに行きます。」娘はこれだけ口をきいて、悲しさうに涙ぐんでしまつた。

「私もこれから町へゆくのだ。」いゝ道件ができたと旅人はよろこんだ。そして二人は、草原を越えていつた。

「お母さんはどこがわるいのです。」

「二三日まへに、毒草をそれと知らずに喰べて苦しみましたのです。」

「それはお氣の毒だ。草の中毒には、ほんとうに、よく効く薬を、私は持つてゐるから、進上しやう。」旅人は腰の印籠の中から、黒いかたまりを、一きれつまみだして娘に與へた。

「中毒なら、これさへのめば、みるみるうちに、よくなるのだ、きつねのきもは、中毒の妙薬だといふことをお前さんもきいてゐるであらう。」旅人がかういつて、黒いかたまりを娘に渡さうとする、にはかに娘の顔がまつ蒼になつて、萩の模様の着物が、怪しくふるへだした。

「そんな化け方では、素人だ、素人だ。」

旅人はカラ／＼と笑つた。

娘といふのは、この野原に住む子きつねだつた。

「お前は、布の目くどりといふのをしつてゐるか、どんなこまかい穴でもくどりぬけるふしぎな術なんだ。これをおぼえぬことには、いちにんまへのきつねにはなれないのだ。」

小きつねはそれからしばらくたつて、旅人から、布の目くどりといふ、ふしぎな術を教はることになつた。

旅人は、脊から大きな袋をおろし、子きつねにこの中へ入るやうに命じた。袋の穴をくぐり抜ける、魔術が習へるのかと、小きつねは大そうよろこんで袋へ飛びこんでしまつた。旅人はニタ



りと笑つて、袋の口をかたく結んで、それを肩にかけて、月あかりの草みちを町へ急いだ。旅人はたくみに生捕つたきつねを賣つて、町の居酒屋でうまい酒をたらふく呑んで、のど佛をよるこばせた。

それから二、三日すぎて、草原で大きなきつねが死んでゐるのがみつかつた。小さいねは、毎晩、娘に化けて、町の醫者へ藥を買ひにでかけたのだらう。

### 神 渡 り (仁科湖)

上高地に行く途中の豊科驛の西一里、烏川村に湖砂渡の勝がある。石英の風化した細砂と一帯の青松と、そして、脚下數十尺に溪流渦まくその奇岩怪石の眺めは奇である。松本藩主は遊覽地として居た。

この附近は勤王の志士仁科盛遠の一族の岩原盛公の據つた城址である。湖砂渡を下に見、對岸に離山を有して東南に筑安平野を一時にする景勝の地である。

仁科湖には蜃氣樓が出現する、又、明神の使者として狐が眞夜中に渡るといふ神渡りの傳説もある。

### 苧岡村の櫻 (大町)

「一寸お尋ね致しまする。」

信州の糸魚川街道と高府街道との分岐點大町の北端の、いとも寂れた蕪茸の茶屋の低く垂た軒に立つて物問ふ美しき女があつた。

それはこの山深い片田舎には見る眼もまぶしい程の美しさで、都風の奥床しく、何處となく氣品の高く歳若い人であつた。

被衣の下から望まれる、殿上人らしい柔かな着物も、幾日かの長い旅路の雨風に晒されたためであらう、色あせ、模様も薄れて小さい穴さへもあいて居た。

穿き馴ぬらしい草鞋の緒は白く、なよやかな、かよはそうな女の足に喰ひ込んで血潮のにじむ



のが眺められた。その物言ぶり、風俗、ひきすり勝ちな音調を見れば、誰にもすぐに旅馴れぬ都人であることがうなづかれる。

「なんでございますな。」

豆腐と餡の煮しめをこしらへて居た、茶店の婆アさんは無愛想に答へた。

「奥州とやらへ参るには、どの道をとれば宜いやらお教へ下さいませ。路のりも三里が程と、先程逢つて馬子殿に聞きましたが、左様にございまするか。」

身はやつれ、いと煩はしき暗黒の影をその天性の美貌に漂はせて寂し気な低い聲で、世を忍ぶかの様に女はきいた。

茶屋の老婆が道は三里で、向つて右に行けばよいと教へた時、彼の女の顔には安心と、悦樂の輝しかさが流れた。繪にもみまはほしい柳眉はさつと開き。そして得も云はれぬ美しい笑ひをほほのあたりに漂はせた。

「その奥州とやらに義経様とおつしやる方が隠れておいでなさると聞き申しましたが、その様な

噂をお聞きにはなりませんか。」

「そりや遠ひます。」だまつて旅の女を眺めながら酒を呑んでゐた男が云つた「お前様は義経公を尋ねてござらつしやるのなら、その奥州は北國の奥州で、これから何百里あるか分りませむぞ右へ行きなされ。」

人目を忍ぶ、しかも弱い女の一人旅、雨に打たれ日に晒され死にもまさる困難も、唯一筋に燃え上がる。情熱の炎にあへぎく、日を重ねて櫻の杖を力に二十里、十里、五里、三里と仁科の里、大町迄辿りついた彼の女——ひそかに鎌倉から、のがれた静御前は義経の住む奥州はまだ幾百里ときいた時、悲痛、落膽、驚愕、失望、彼の女の悲しみと驚きは言はふ方もなく、狂はしげに物の見さかひも無く、無我夢中、半道計りの刈間村迄走つて来た時呼吸は切れ、身は疲勞と困憊の極に達し路ばたの草叢にばつたり倒れて、二三度、

「戀しき夫……」

「戀しき義経様……」



幽かに呼びながら息がたへた。

人生とは苦痛と悲哀の別名か——美しき静御前の肉體は信濃の國の土と化した。彼の女の悲しき旅の前後まで御伴した櫻の杖は芽を出した。そして高き熱情の魂は櫻の花と化して、春毎に里人に唄はれて居る。

### 神垣内（上高地）

日本アルプス山中の絶勝地上高地なる地名の文字は近年參謀本部の地圖により、確定的に用ひられる文字であるが、其上高地なる文字は誤謬であつて、實は「神垣内」でなければならぬと同地の仙境明神池の傍に奥社を有する、南安曇郡穂高町縣社穂高神社の係りから其筋に改字願を提出した。

理由を聞くと、同地は太古、穂高見命の開拓したまふた處で、附近一帯「神垣内」と稱へ、神孫數世の陵所として由緒正しく、現に奥社の周圍五町三反五畝十三歩は、穂高見命の雄據の場所

であつた事も、疑ふ餘地はないらしい。

語原は、垣内の「カキウチ」が「カウウチ」となり更に「カウチ」と轉化したらしく、信府統記時代には「神合地」「上河内」などと記された事もあつて最近の上高地にまで變つたらしいが、現在では穂高見命雄據時代の神域といふ意味も更に不明であり全く史蹟と沒交渉であるから、正しく神垣内と、改字するが至當であるといふのである。

### 櫻の精（上高地）

有名な燒岳に登り、岳川岳、穂高岳、槍ヶ岳、大天井岳を縦走する人々は、上高地温泉を根拠地とするであらう。

昔——村の若者が附近の山林に分け入つて獲物を探して居つた。その日は、どうしたものか一匹の兎にさへも出遣はないので、だん／＼と山奥に入つてしまつた。



気がついた頃は彼が平常獵に行く山々とはすつかり景色が異つて居た。何千年も前から落ち重なつた朽葉は、蒲團の様にやはらかで、一足毎にふわりふわりと足跡が凹む。里に引返さうとしたが山になれた彼にも道が分らなくなつた、彼はもう夢中で谷から峰へと歩きまわつた。

と、意外にも美しい櫻の花が一面に咲き亂れたところに出た、花は散りも初めず咲きも遅れずに満開だつた。彼は、あまりの美しさにしばらく花に見とれて居た。

「あなた。」

女の聲、思はず見ると、咲き亂れた櫻の花の下に意外にも美しい女がたゞすんで微笑んで居るのだ。

「あなた吃驚なさいましたか、わたしはこの山に住む女で御座います。」

女をつく息が、かすかに頬から首にかけて觸れた。女は實際美しかつた。肌の色は白臘のやうに白く、冷たい感じのする程滑らかであつた。その眼光はどこともなく力強い魅力を持つてゐて

顔を見合せて若者は何かしら強い壓迫を感じた。

「里に出るにはどの方角を行けばいいのでせう。」と、それでも若者は訊いた。

「お教へしませう。でも、その前にわたしの頼みをきいて下さい。」

「どんなことでせう。」

女はそれに答へやうともせず若者に寄りそつた、若者はたゞもう全身に幸福の溢れるのを感じた。そしてその幸福を一生逃すまいとするやうに、そつと女の體を抱へた。

そのあとで女は村へ歸る道を教へた、そして念を押すやうに、

「きつと明日も来て下さい。」と、熱っぽい聲で云つた。

「來ますとも。」

「待つて居ますから。」と、囁いたかと思ふと女の姿はさながら煙のやうに消えて櫻の花びらが散つた。

若者は急に怖ろしさと氣味悪さを感じて走り出した。夕暮近い頃村に歸つた。



彼は山中での出来ごとには恐ろしい夢を見たやうに思つた。それは、息づまる程に幸福な夢でもあつたけれど……。

その次の日、女との約束を思ひ出したけれど、氣味が悪いので遂に山には行く氣がせず約束を果さなかつた。

その次の朝、若者は村に咲く櫻の花の下に散つた花びらの中に身を埋めて冷たくなつて居た。

### 遊女の碑（針の木峠）

大町から越中に入るには針の木峠を越えるのを普通とするが、この針の木峠の山道に昔小さい石碑があつて里人は「遊女の碑」と呼んで居たが、それには、悲しい、しかし美しい話が残つて居る。

昔、松本の遊里に全盛を唄はれた遊女に、雛菊といふ艶艶な女があつた。

ある年の冬の夕暮、紅燈の明りを罩めて媚めかしく降り出した粉雪に濡れて、妓樓の暖簾を潜

つた若者があつた。

「雛菊といふ女に遇はしてください、村に歸つて土産にする」と、打切棒に言ひ放つた若者は重たさうな織の財布を突き出した。

「嬉しう思ひます、この雪に、よく来て下さいました。さあ、どうぞお上りなさいまし」と、雛菊も嬉しさに云つて頑丈な若者の手に白臘のやうな手をそへて、片手に小襦を取つて、部屋に連れていつた。

山深い針の木峠の奥で炭焼こそして居つたが雛菊はこれまで遠ぞ見たこともない程の、純な若者であつた。彼は炭を賣る取引のために山を越へて松本に出て來たのである。

その夜は甘やかされた夢に明けた。

青春の血の燃ゆる若者は、美しい噂の主を一眼見たさにふと踏みこんだ麻の一夜が、固い縁の糸を結んで、年に一度の儚ない逢瀬を思ひ焦れる身となつた。

雛菊もひたすらに師走を待つた。



雪の夕暮約束通りに若者は来た。長い一年振りの逢ふ瀬は楽しかった。

若者は病氣になつた。雛菊の介抱もその甲斐なく女の腕に身を投げつゝ、

「わしが死んだことを、どうぞ、親達にそなたから知らせて呉れ」と、苦しい息の下から頼んで冷たくなつた。

それから二三日あとのこと、大町のある家の前に鯛々とした姿を現はした美しい女があつた。

「ちつとお尋ね申します。針の木を越すにはこの路を行けばいゝので御座いませうか。」

目深にかむつた笠を取つた顔に、旅疲の瘦せは見えるけれど、艶麗さは變らなかつた。

「針の木峠を越すにはこの路だがなか／＼の險路ですぞ。そなたにはお連れでもありませんか。」

「いえ、一人旅でございます。」と、雛菊は消え入るやうな聲で答へた。

「女の一人旅は心細い、では、俵を案内させませう」と、親切な老婆は俵を呼んだ。

何気なく顔をあげた雛菊は、危く倒れやうとして僅かに、手にしてゐた竹杖で身を支へた。清

しい味、紅い唇、それは靡で二世を契り、はかなくも死んで行つたいといふ男に生寫しなのだ、

「さあ行きませう。」

「有難う存じまする。」

二人はやがて峠の路にさしかゝつた。

「とう／＼雪になり居つた」と、誰に云ふとなくかう言つて、若者は雛菊を振返つて見た。

女は若者のかけに力強く寄り添ふた。峠を登るに従つて雪は深くなつた。探り探ぐりに突く杖

の先が這つて雛菊は膝をついた。遠慮がちに差出す若者の手を、女は思ひ切つて固く握りしめた二人の思ひは燃えた。

ふと、夢心地から醒めた若者の顔には驚きと困惑の色が浮んだ。いつ知れず二人は路を踏み迷ふて居た。

それを知りつゝなほも歩き続けた。

「呀ッ」と、いふ悲鳴、若者は足元の雪が崩れて暗々たる雪の窟底深く落ちて行つた。

それから時が過ぎての後、雛菊は、針の木峠の絶頂の、降り積つた雪の中に、永久に美しいそ



の魂を淨化して、それは丁度くづれ散つた牡丹の花のやうな豊麗な姿を、越中の方に向けて埋めて居た。

### ザラ峠の新史實 (針の木峠)

天正年間北陸の勇、佐々成政がその手兵を率いて、雪の北アルプスザラ峠及針ノ木峠の嶮を越え越中から信州へ出た史實は、山岳熱の高い今日、非常に興味深い史實であるが、元龜天正を遡る事既に百年以前、後花園天皇の御代に於て時の松本井川城主小笠原義康が針ノ木峠からザラ峠を越え、越中から飛騨に攻め込んだと云ふ、極めて興味ある新史實の記載してある古記録を松本市史編纂に従事してゐる元松本高女校長唐澤貞次郎氏によつて発見された。當時飛騨の城士姉小路一族が松倉城によつて足利將軍の命を奉ぜず、反抗の氣勢を示したので追討の命を受けた小笠原義康は、越中の國士と力を合せて松倉城を陥るべく、手兵二千を引具して、針ノ木峠からザラ峠を越え丁度佐々成政の逆コースをとつて越中に出たものであると云ふが、手兵二千を引

具してとあるが、佐々成政の如く冬期ではなからうから、よき案内者さへ得られたなれば必ずしも困難ではなかつたらう。

### 借り女 (針の木峠)

南北兩朝の争ひは果て、都は足利三代の治平に、榮華を夢みてゐた。

けれど、それは都だけのことで地方は、戦亂の餘燼未だにさらす暴力政治と、虐政とが到るところに、はびこつてゐた。

貢米を納めぬ百姓の家からは領主が恣に、人妻を奪ひ、生娘を連れ去つた。服従の奴隷であつた百姓達は、これを「貢米賃」として、差して不思議なこととも思はなかつた。

腕力の衆に優れた男は、都へと志した。暴力では、どんな美女も奪ふことが出来た。かうして「借り女」と稱して、都から田舎へ拐されてくる女も、決して少くはなかつた。

奥州の寒村に「秀鶴」といふ賣僧がある。



遙々、都へと志す魂膽は、劣らぬ美女を、わがものにとの欲念に、ひたすらであつた。みすゞ刈る信濃路の、針の木越のとある一邑に辿りついたときであつた。

ふと——京の「借り女」でもあらうかと思はれる眸の涼しい女が名主らしい老人に随つて悄然と歩み運んでゐるのにあつた。

無造作に藁で束ねた髪も、つぎはぎの粗末な衣物も決して彼女の美しさを増すとも、損つてはゐなかつた。

秀鶴の愛慾は獸のやうに燃えたつた。長い旅路の飢がなみのやうに、激しい力で押寄せて来た。

「さうだ……」秀鶴は舌打をしながら、その二人に追付いて、仔細あるらしい、女の顛末を聴きとつた。

「俺は、かうして諸國を行脚する旅僧ぢや——貯えの多からう筈もないが——餘りお氣の毒にも思ふによつて——」

と、若干の「貢米賃」を代りに支拂つて名主と稱する老人を口説きおとした。

女が手に入つたところで秀鶴はすっかり有頂天になつて了つた。

都へ上ることもいらぬ。この女で、もう都のすべての女など眼に入らぬであらうとさへ思つた。

彼女の感謝は、やがて次のやうな涙の告白に變つていつた。

「足利幕府の怒りにふれ、やんごとなき奥方と一緒に配流されて、信濃へ参りました。ある日のことでした、楢を集めに山へ参りましたのに、恐ろしい荒くれ男に捕はれて、それからといふもの「借り女」として、つらい月日を送りましたのに、今日は、またその男から、領主へ「貢米賃」としてつれてゆかれるところでございますました。」

肩をふるはして、彼女はすゝり泣いた。

「かうして、けふ御出家に救はれるのも、何か宿世の縁で御座いませう。南無阿彌陀佛々々」大地に五體をなげて、合掌しながら喜びと感謝が、女の顔にまさしくと現れてゐた。

秀鶴は、野獸の心から、だんく佛心が萌してきた。



自分を禮拜する、いとしい女のために、まこと、出家らしい清らかさとなつた。たとへ本能的にせよ、自分の愛するものから、感謝されることは無限の歡喜であつた。「南無阿彌陀佛——」

思はず秀鶴も合掌して、かつて経験したことのない法悦にひたつた。

女は配流の人の許にかへされた。

好色の秀鶴は、宿場の中程に石燈籠一揃を建立したまふ、飄然とまた旅路へ上つた。

### 穂 高 神 社 (穂高岳)

信州安曇郡の一の宮に穂高神社といふのがあつて、蛇が神のお使だと傳へられる。そして、今日でも、この神社の祭典には、神官が二十一日の間、水垢離をとつて身を淨めた上社の奥宮である日本アルプスの穂高岳へ登つて神のお使を迎へて来る。

それは、山で蛇を探るのである。そして、どこかで蛇を見つけさへすれば「有難い、祭神のお

使を見届け申した」と、言つて、神官は歸社して、盛大な祭典を営むのであるが、もし、蛇を見ない時は、見つかるまで何十日でも山に留まつてゐなければ、神事を擧げることが出来ない習慣となつてゐる。

そして、今も尙、氏子には必ず一人づゝ腋の下に鱗のある者が生れるといふが、それには次ぎのやうな豪壯な傳説がある。

大昔のこと——女神嬬氏が五色の石を煉つたときに、誤つてその石の一片を信濃國に落した。石のために地を穿つこと數十里に及んだ。それがやがて安曇、筑摩の地にわたつて漫々たる水をたゝへた大湖水となり、石はかの高山峻嶺の連なる日本アルプスとなつた。

その後、安曇連の祖先である穂高見命が、この信濃に天降つた時には、今日の松本平はその湖水の底となつてゐた。穂高見命は幾十年ともなくこの湖畔に住んでゐたが、湖を見るたびに、

「この水を他に落しさへすれば湖底は平野となつて民草の耕地として立派なものになるのだが。」と考へられた。しかし信濃は山國、殊にその大湖水を圍んでゐる現在の日本アルプスの千山萬